

ガイド教本・アイヌ民族編

社団法人 北海道観光振興機構

アイヌ民族に関するガイド

北海道は古い時代から、アイヌ民族が暮らしていた土地です。

雄大な自然景観、新鮮な山海の恵み、豊富な温泉など、他の都府県には見られない特色に彩られた豊かな環境にあります。

しかし近年は、単に物見遊山的な楽しみ方だけではなく、今までとは違った新しい旅行のあり方として、その土地ごとの文化歴史に触れて知的好奇心を満足させたいという要望が増えてきております。そのニーズに応える為、体験型やエコツーリズム型等の様々な旅行商品が研究開発され、お客様に提供されてきております。

しかし、北海道の歴史、文化の基層をなすアイヌ民族とその文化を正しく紹介した資料が少ないため、お客様と直接接しているガイドの皆様が大変苦労をされていることが報告されました。

このため、先に刊行しました「アイヌ文化を理解するための手引き」を基に、改訂し本書を発行する運びとなりました。

現場でご活躍されている関係各位の皆様はこの資料を有効に活用していただき、アイヌ民族に対してのより深いご理解と北海道観光の発展に役立てていただければ幸いです。

また、疑問などがございましたら気軽にお問い合わせください。

目 次

凡 例	P 1
1 . アイヌという言葉	P 4
2 . 歴史について	P 6
3 . 人々の暮らし	P 8
4 . 歌や踊りと口承文芸について	P 46
5 . 言語について	P 66
6 . 地名についての由来や意味	P 70
7 . イオルの再生について	P 75
8 . 人口の推移について	P 78
9 . 北方領土について	P 81
10 . 工芸、民芸品について	P 85
11 . アイヌの人物紹介	P 87
12 . 使用上注意すべき主な用語について	P 102
13 . よくある観光客からの質問	P 117
14 . 主なアイヌ関係団体・機関	P 121
15 . アイヌ文化関連施設	P 122
16 . 年 表	P 126

このガイド教本は、(社)北海道観光振興機構ホームページにも掲載しております。

< 検索方法 >

北海道ぐるり旅 HP

<http://www.visit-hokkaido.jp/soshiki/data/ainu/index.html>

ガイド教本・アイヌ民族編

凡 例

アイヌ語の読み書き

- ①本書のアイヌ語は、カタカナ表記としました。

母音で終わる音

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ		トゥ	テ	ト
チャ	チ	チュ	チェ	チョ
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
パ	ピ	プ	ペ	ポ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ	イエ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ			ウエ	ウォ

後ろに母音が続かない音

ブ	ツ	ク	ム	ン
シ	-ラ,-リ,-ル,-レ,-ロ,	イ		ウ

- ② 小さい ブ ッ ク

練習して慣れないと区別の難しい発音です。日本語の「さっぱり」という言葉をいうつもりで「ぱり」をいわず「さっ」で止めると、アイヌ語のサブになります。

「さっと」という言葉をいうつもりで「さっ」

で止めると、アイヌ語のサツになります。

「さっき」という言葉をいうつもりで「さっ」
で止めると、アイヌ語のサクになります。

いろいろ例を挙げますので、耳慣らしをしてください。

サブ	sap	前に出る
サツ	sat	乾く
サク	sak	夏
ユク	yuk	鹿
チカブ	cikap	鳥
ペツ	pet	川
チェブ	cep	魚

③ 小さい シ 大きい シ

小さいシはささやくような音で、シに聞こえたりリスに聞こえたりもしますが、シに統一して表記します。大きいシは、はっきり母音を発音する必要があります。

④ 小さいラ,リ,ル,レ,ロと大きいラリルレロ

小さいラ,リ,ル,レ,ロで書かれる音はあいまいに、大きいラリルレロで書かれる音ははっきりと発音します。

ケレ	ker	靴
ケレ	kure	触る
エトロ	etor	鼻汁
エトロ	etoro	いびきをかく
キサラ	kisar	耳
クキサラ	ku=kisara	私の耳

- ⑤ トウ tu の読み方は「トゥナイト」の「トゥ」と同じような発音です。
- ⑥ イェ ye の読み方は「イェスタデイ」の「イェ」と同じような発音です。
- ⑦ ウェ we の読み方は「ウェールズ」の「ウェ」と同じような発音です。

- ・本書におけるアイヌ語表記は、(社)北海道ウタリ協会『アコロイタク アイヌ語テキスト1』(1994)にほぼ準拠しています。
- ・本書は、(社)北海道観光連盟『アイヌ文化を理解するための手引き - 新たな観光をめざして - 』(2004)を基礎に作成したものです。
- ・上記以外の参考文献は、項目の最後に記載しています。

1. アイヌという言葉

現在、アイヌの人々は、独自の言語・文化を持つひとつの民族として日本の国の中に存在しています。北海道の調査（平成11年）によると、北海道内の人口は約2万4千人となっていますが、実際には北海道を中心に全国で5万人とも10万人とも言われています。

この《アイヌ》という言葉が、アイヌの人々を指す民族呼称として広く日本で使われるようになるのは、明治時代以降のことです。

《アイヌ》という言葉は、アイヌ語で「人間」を意味します。

さらに詳しく言えば、妻の側からみた夫、子供の側からみた親（父親）、女性の側からみた男性、男性の敬称としても使います。

また、アイヌ語で神を表す《カムイ》に対して、人間という意味の《アイヌ》という言葉を使いません。従って《アイヌ》という言葉は、差別や蔑視の気持ちを含んだ悪意のある言葉ではありません。

アイヌ語の中でもごく一般的な、とても大事な言葉です。江戸時代の後半から明治時代以降、北海道に本州以南から多くの人々が移住し、その中から北海道に先住するアイヌの人々を蔑視する風潮が生まれました。

本州以南からの移住者によって《アイヌ》という言葉が侮辱的な意味で使われるようになったため、

アイヌの人々の組織である(社)北海道ウタリ協会は、昭和36年に名称を《アイヌ》から《ウタリ》に変更しました。また、北海道庁など行政機関でも、アイヌの人々を表すのに《アイヌ》という言葉を使わずに、《ウタリ》という言葉を用いるようになったのです。

《ウタリ》という言葉は、本来は身内、親戚などを指すアイヌ語であり、さらに仲間、同胞という意味合いも含まれます。

しかし、現在ではアイヌの人々は、再び《アイヌ》という誇りのある言葉を使うようになってきました。

本州以南から北海道に入植、移住した人々のことを、アイヌの人々はアイヌ語で《シサム》と呼びました。これは「隣人」の意味です。

現在、アイヌの人々は学術的にも国際社会の中でも、ひとつの民族として位置づけられています。「アイヌの人々」に対する表現としては「アイヌ民族」が望ましいといえます。

2. 歴史について

北海道の名称は、明治2年に採用されましたが、それ以前は「蝦夷地（えぞち）」といい、単に「蝦夷」ともいわれました。この言葉は日本という国家を形成した人々により命名され、使用してきましたが、その由来は中国にあります。中国の歴代王朝の一つである魏の国の歴史書に「東夷伝（当時の日本を指す）」があり、「夷」は、中国にとって東方に住まう異文化の人々への蔑称でした。

中国は、四方の異文化をもつ人々に対して、「東夷、南蛮、西戎、北狄」という表現をしていました。日本列島は7,000kmという、やや斜め東西に長く、日本では、中央政府に服従しない人々を「まつろわぬ人々」といい、地理的に一致させ、当時の都を中心として、それ以東に古くから居住する住民に対し、「夷（えびす、えみし）」東夷（あずまえびす）」とし、以西の人々に「戎（えびす）」西戎（にしえびす）」の文字を採用しあてがったのです。

今日でも以東では、恵比寿や恵比須を、以西では、戎（えびす、えべす）の文字を使っています。ちなみに「蛮」「狄」も（えみし）と訓読しますが、都の南や北は日本海や太平洋で人々が居住していないことから、この文字は使用されませんでした。「夷」は、胡、蛭子とも書かれ、平安期頃より「蝦夷」とも表現される様になり、本州の開発が進行するに及んで、「蝦夷」は時代と共に北上し続

け、鎌倉期には北海道及び、それ以北をも含めた漠然とした地域を指すようになっていったのです。

アイヌの人々の祖先は北海道、樺太、千島列島の各地に、土器や石器等の遺物や遺跡を残した人々であり、数万年も平和裏の内に生活を営み続けてきました。明治以降にあってアイヌの人々の居住範囲は、北海道、南樺太、千島列島でしたが、使用していたアイヌ語の地名は、北樺太西海岸、黒龍江河口、カムチャツカ半島の南端、それに本州の東北地方（これより以南については未調査）と広範囲で、日本列島の半分または、それ以上の広がりの中で、かつてはアイヌ語が話されていたことを証明しています。

3. 人々の暮らし

アイヌ民族の文化や暮らしは、時代とともに様々な変化してきました。現在の生活 - 衣食住、社会のしくみや教育、仕事、遊び - は、日本に住む大多数の人々とあまり変わるところはありません。

しかし、アイヌ民族が独自の文化として将来にわたり継承しようとする部分については、自らその保存と伝承に積極的に取り組んでいます。

(1) 着る

現在、日常生活の普段着として、アイヌ独特の装いをすることはありません。しかし、伝統的な儀式を行なうとき、歌や踊りを披露するときには、独特の刺繍を施した着物や装飾品で正装し、こうした際に着るための晴れ着は現在でも作られています。アイヌの人々にとって鮮やかな刺繍の晴れ着は、自らのアイデンティティーを示す誇りある民族衣装として大切にされています。現在の晴れ着は、主に木綿を素材に作られています。

かつて、衣服の素材には、獣の皮、サケなどの魚の皮、オヒョウやシナノキなどの樹皮の繊維、イラクサなどの草の繊維などが用いられました。樹皮の繊維は、山から立木の樹皮を剥がし、細く裂いて糸を作り、機織りで反物にしてから着物かたちに縫い合わせ、そこに木綿の布や糸で刺繍を施して仕上げる。こうした樹皮製の着物の製法は、伝統文化のひ

とつとして今に伝承されています。

刺繍の文様は、魔よけの意味を持っているとも言われ、現在でも晴れ着の着物の他に、普段持ち歩くための手提げ袋や小物入れなどにも施されて実生活の中で生かされています。

(2) 食べる

かつて食料の多くを自然の恵みに頼っていたアイヌの人々は、安定的な食料の確保のため、狩猟・漁撈・山菜採集・農耕など調達方法をいくつにも分散していました。狩猟・漁撈は主に男性の仕事、山菜採集・農耕は女性の仕事でした。

狩猟は、ヒグマやエゾシカなど大型の獣からエゾテンやエゾウサギなどの小さいものまで、動物の習性を利用して捕獲し、食用にするとともに、生活用品に加工したり交易用に使われました。

漁撈で得られる魚のなかで、サケは最も重要なものです。秋に川を遡上してくるサケは、大量に捕獲され、その多くは保存食料として蓄えられました。

山菜は、大きく葉や茎を利用するものと、根から澱粉をとるものとに分けられ、食用のほか、薬用としても使われました。

農耕は、ヒエ・アワ・キビなどの栽培が中心であり、こうして得られる穀物は日常の食料のほかに、御神酒を作るための材料としても欠かせないものでした。

現在、アイヌの人々は食料調達をこうした方法に依存しているわけではなく、食糧事情は日本に住む大多数の人々と殆ど変わるところはありません。

そのなかで、自然の産物を食料として手に入れ、それを調理・加工・保存するためのかつての知恵や技術とともに、自然の恵みを尊ぶ精神もまた、今日に継承されています。

自然の産物を中心とした食料は、煮る・焼く・蒸す・炒める・茹でる・干すなどの方法で、また新鮮なものは生のまま素材の風味を生かして調理されました。

普段の食事は肉・魚・山菜などを煮込んだ汁物《オハウ》とさっぱりした穀類の粥《サヨ》で、これに季節の味覚を楽しむ副菜がつきます。儀式の際には、供え物として特別の料理が作られることもありました。

こうした様々な料理の中には、伝統儀式用として、また健康を維持するため、さらには何よりその料理が美味しいという理由で現在でも作られているものがあります。

料理方法を工夫したり、材料を手に入りやすいものに変えて作られる料理もあります。

(3) アイヌの植物利用～薬用を中心に～

・イケマ（アイヌ語名：イケマノペヌフ）

ガガイモ科のつる性多年草で、北海道～九州、南千島、中国に分布します。根を食用とするほか、薬用として根を下痢、腹痛、虫下しには生のまま服用し、頭痛には焼いて布に包み頭にあて、歯痛にはこれを噛み、切り傷、化膿防止には煎汁で患部を洗うほか、打ち身、眼病などにも用いました。また、霊力のある植物と考えられていることから魔払いなど呪術にも用いられました。漢方では根を牛皮消根（ゴヒショウコン）とよび利尿、強精、強心薬として利用されます。



・エゾトリカブト/オクトリカブト

(アイヌ語名：スルク)

キンポウゲ科の多年草で、毒性の強い植物として知られ、主として塊根を狩猟の際の矢毒として使用しましたほか、薬用としては塊根エキスをリュウマチ、顔面神経痛、その他の神経系等の諸病に塗布しました。漢方では塊根附子(プシ)、烏頭(ウズ)とよび、強心、鎮痛などに利用されます。トリカブトに含まれるアルカロイドの成分であるアコニチニンには青酸カリの百倍近い毒性があるといわれ、呼吸中枢麻痺や心臓障害、運動神経の麻痺などを引き起こし中毒死することもあります。



・オオウバユリ

(アイヌ語名：トゥレプ/キウ/エラパシ/ハル)
ユリ科の多年草で、鱗茎はユリ根と同じく幾重もの鱗片からなります。花をつけるものを雄株、つけないものを雌株と呼び、雌株の鱗茎を6月下旬から7月初旬にかけて掘り、でん粉に加工したものを腹痛や下痢などの薬として用いました。オオウバユリの鱗茎はギョウジャニンニクとならんで「ハルイッケウ(食糧の背骨)」つまり「食の中心」といわれるくらい、アイヌの食生活にとってたいへん重要な植物で、その利用や保存方法には独特なものがあります。



・ガマ（アイヌ語名：シキナ）

ガマ科の多年草で、穂の部分黒焼きにして油と混ぜて練り、おできの薬として用いました。漢方では花粉を蒲黄（ほおう）と呼んで下血、吐血に用い、全草を香蒲（こうほ）と呼び利尿や浮腫などに用いました。ガマの葉は主として蓆の材料として用いられるほか、花穂をほぐして綿の代わりにも利用しました。



・ギョウジャニンニク

(アイヌ語名：プクサノキト)

ユリ科の多年草で、葉や茎を乾燥させて保存し、薬用としては風邪や結核、脚気などのほとんどの病気に煎じて服用しました。また、火傷や凍傷、痔、打ち身、インキンタムシなどには煎汁で患部を洗滌し、温湿布をするなどして利用しました。食用として汁の実やラタシケブ、ご飯に炊き込むなどして食べられました。ビタミンの含量の高いことが明らかとなっている植物で、強い臭気が特徴です。



・クサノオウ（アイヌ語名：オトンブイキナ）

ケシ科の越年草で、薬用として便秘の際に茎葉を煎じて服用し、あるいは肛門に茎を差し込むなどして用いました。痔や婦人病には茎葉を煎じて服用するほか、煎汁で患部を洗うなどして利用しました。茎や葉を切ると黄色の液汁がでることからオトンブイ（肛門）キナ（草）また、痔や便秘の薬として用いることからこの名で呼ばれるのだといえます。漢方では白屈菜（はくくつさい）と呼ばれ、全草を煎じて、湿疹などの患部を洗うのに用いられるほか、生の茎葉の絞り汁や花期の葉を細かく刻み、焼酎に漬けたものを打撲、腫もの、虫刺され、たむし、疥癬などの患部に塗布します。一般には有毒植物として扱われているため内服は危険です。



・クロユリ

(アイヌ語名：アンラコロ／ハントコロ／ハハ)

ユリ科の多年草で、鱗茎から澱粉を採り、消化器疾患、特に下痢や胃部、及び上腹部に疼痛を伴う症状に用い薬用としました。葉は食用として汁の実とし、鱗茎は茹でてアザラシの油や魚油をつけて食用としました。鱗茎の鱗片を米と一緒に炊き込んだり、澱粉を粥などに入れて食べました。葉を絞った汁で文身(いれずみ)の染料としても用いられたともいいます。一般には良質な澱粉を片栗粉の原料とし、鱗茎から澱粉を採り、すり傷、腫れもの、湿疹の薬として利用するほか葉、鱗茎を食用としました。



・コウライテンナンショウ

(アイヌ語名：ラウラウ)

サトイモ科の多年草で、別名、蛇の松明とも呼ばれます。胃痛や、腹痛には果実を用い、神経痛やリュウマチ、打ち身などには塊茎の有毒部分を取り除くなどして摩り下ろして、布などに伸ばし患部に貼り用いました。食用としては、秋、果実が赤くなってから塊茎を炉の灰の中に埋けて焼くか、鍋で蒸すなどして食用としました。漢方では塊茎を天南星(てんなんしょう)と呼び、去痰、鎮痙薬として各種処方に応用され、民間では腫ものなどの吸い出し薬として利用されます。



・チョウセンゴミシ

(アイヌ語名：フレハッノレプニハッポンカラ)

マツブサ科のつる性落葉低木で、蔓を煎じて風邪薬や解熱剤、船酔いなどに服用し、眼病の際に患部を洗滌しました。また、神経痛の際には蔓を風呂に入れて沸かして入るなどし、果実は煎じて咳止めとしました。食用としては果実を生食し、団子や魚などのつけ汁とし、蔓を粥に入れて食べるなどしました。蔓、果実とも煎じてお茶としても飲まれました。漢方では果実を五味子(ごみし)と呼び、咳止め、滋養強壮に用いました。果実は食べると甘味、辛味、酸味、苦味、塩の五つの味がすることからこの名がついたといえます。



・ナギナタコウジュ

(アイヌ語名：エント/セタエント)

シソ科の一年草で、花穂の形が薙刀に似ており、中国の香薷に似ていることからこの名がついたといわれています。茎葉を煎じて風邪や二日酔いの際に薬用として用い、また、粥の香りつけに入れて炊くほか、日常のお茶としても飲みました。ナギナタコウジュには強い臭気があることから、病魔を遠ざけ、常用すれば体を健康に保つことができると考えられていたといわれています。漢方では香薷(こうじゅ)と呼ばれ、解熱や発汗、利尿の効果があることから、風邪、腹痛、神経痛、リュウマチなどに用いられます。



・ミズバショウ

(アイヌ語名：パラキナ/イソキナ)

サトイモ科の多年草で、別名、ヘビノマクラとも呼ばれ、白い仏縁苞(ぶつえんほう)が特徴的です。葉を腫れものやおできに貼って膿を吸い出し、足の水疱には温疱にするほか、発汗剤としても用いました。根は乳房炎の際にすり潰して塗った。漢方では根茎を海芋(かいう)と呼び、便秘、発汗、急性腎炎、痔などに用いられます。



・ヨモギ/エゾヨモギ/オオヨモギ/ヤマヨモギ
(アイヌ語名：ノヤ)

キク科の多年草で、葉を揉んで傷口に当て止血に用い、葉を煎じて咳止め、虫下しとして服用しました。虫歯には葉を塩で揉んでその絞り汁を患部に用い、喉の痛みには葉を煮立ててその湯気を吸い、枯れ葉を揉んでモグサとしても用いました。オトコヨモギ、シロヨモギも同様に用いられ、食用には若葉をアワや米などに混ぜて団子にし、刻んで粥にふりかけて食べました。また、ヨモギの茎を束ねて作られた人形は非常に強い神と考えられており、人間の手に負えぬ悪神や魔物を退治するものだといわれています。



樹木

・イチイ

(アイヌ語名: ラマニ/クネニ(木)/アエツポ(実))

イチイ科の常緑樹で、別名、オンコも呼ばれます。果実を脚気の薬や利尿剤として用い、内皮を煎じて下痢止めの薬としたほか、葉の黒焼きを煎じて肺結核喀血に服用しました。果実は生食し、健康にも良いとして肺や心臓の弱い人には大いにすすめたといえます。民間では葉を一位葉(いちいよう)とよび利尿、糖尿病に用い、果実を咳止めや下痢止めに用いました。イチイは弓やカンジキの材料として利用されるほか、彫刻の材料として広く利用されます。内皮は染料として利用され、アットウシなどの韌皮繊維を赤く染めるのに用いたといえます。また、有名な飛騨高山の彫刻に使われる材料のイチイは北海道産のものが多く使われています。



・イヌエンジュ（アイヌ語名：チクペニ）

マメ科の落葉樹で、一般にエンジュと呼ばれますが本来のエンジュは中国原産です。この木の発する強い臭気を悪神が嫌うと考えられていたことから、流行り病などがあると戸口や窓口などに吊るして病魔除けとしたほか、イナウ（木幣）もつくられました。また、家の柱や器具などの材としても多く使われ、現在では、木質が彫刻に向いており、白と茶色のコントラストがアクセサリーなどの土産品を引立たせることから材料として多く利用されています。

・エゾマツ

(アイヌ語名：スルク(木)/スルクヤラ(樹皮)
/メチロホ(根))

クロエゾマツとも呼ばれるマツ科の常緑樹で、傷口に樹脂を塗りつけ、風邪の際には葉を鍋で煮て、その汁を衣服につけてその臭いを嗅いだといわれ、臭気が病魔を払うと考えられていたことからだといわれます。矢柄として用いられるほか、トンコリなどの楽器の材としても使用されました。樹皮は屋根や壁を葺く材として使われ、根は曲げ物などを綴じるのに利用されます。枝が垂れ下がったように伸びるのが特徴です。



・オヒョウ（アイヌ語名：アツニ／アハニ）

ニレ科の落葉樹で、アイヌ語のアツニは繊維をとる木の意味で、アイヌ衣服の代表的なアットウシ（樹皮衣）の材料となります。春先、皮を剥ぎ、内皮を温泉や沼などに2～3週間漬けるなどして繊維をとる。繊維は細く裂いて軽く撚りを掛け、結んで糸をつくり、機に掛けて反物を織ります。このオヒョウの反物もアットウシと呼び、交易品としても使われました。



・カツラ （アイヌ語名：ランコ）

カツラ科の落葉樹で、高さが20～30mと比較的真っ直ぐに伸び、幹周が1～2mと太いことから丸木舟の材料として使われるほか、臼や杵、まな板、お盆などの生活道具の材料としても多く使われました。また、染料としても使われたほか、この木の灰を煮た上澄みを洗髪にも利用しました。ランコは蘭越などの地名の語源ともされています。



・キタコブシ

（アイヌ語名：オブケニ / オマウクシニ）

モクレン科の落葉樹で、風邪や伝染病の際に樹皮や枝を煎じて服用したほか、怪我には木の削り屑で温湿布として使用しました。樹皮を煎じたものをお茶として日常的に飲まれました。漢方ではつぼみを辛夷（しんい）と呼び、鼻炎や蓄膿症、頭痛に用います。この木の皮を剥ぐととても良い香りがするのでオマウクシニ（良い香りのする木）と呼ぶが、天然痘などの伝染病が流行するときはその香りに誘われて病魔がやってくるかもしれないので、病魔を避けるために故意にオブケニ（放屁する木）と呼んだといひます。



・キハダ

(アイヌ語名：シケレペ(実)/シケレペニ(木))

シコロとも呼ばれるミカン科の落葉樹で、11月頃の霜が降りる時期に果実を採取し、薬用、食用としました。果実を煎じて、喘息や風邪、胃痛、痔などに服用し、しもやけには、果実とサイハイランの根を磨り潰して用いました。内皮は胃の薬として煎じて服用したほか、打ち身や腫れものにも煎じて用いました。黄色い内皮は漢方で黄柏(おうばく)と呼ばれ、食中毒、食べ過ぎ、打ち身、捻挫、突き指、水虫、口内炎に用いられます。

食用として、果実をラタシケブの材料として用い、豆やトウモロコシ、カボチャなどと炊き合わせて食べます。また、この木は儀礼の際に神へ捧げるイナウ(木幣)の材としても使われました。



・タラノキ

(アイヌ語名：アユシニ / アイコロニ / エネンケニ)

ウコギ科の落葉樹で、胃痛や糖尿病に良いといわれ、根を煎じて服用しました。若芽は汁の実などにして食べました。漢方では根皮を櫛木皮(そいぼくひ)と呼び、煎じて健胃、整腸、強壮に用いました。この木の表面には鋭い棘が密生しているので病魔が恐れて近づかないよう戸口や窓口、分かれ道などに立てたといいます。



・トドマツ（アイヌ語名：フブ）

マツ科の常緑樹で、松脂をあかぎれに塗るなどして薬とし、果実は食用としたといえます。樹皮は家屋や猟に出た際に作られる仮小屋などの屋根や壁を葺く材として使われました。また、松脂は接着剤としても使われました。悪い夢など見た時などこの枝で手束をつくり、魔払いをしたといえます。エゾマツの枝が垂れ下がっているのに対しトドマツは手を広げて万歳でもしているかのように上向きに枝が伸びるのが特徴です。



・ナナカマド（アイヌ語名：キキンニ）

バラ科の落葉樹で、眼病の際にこの木を削って水に浸し、患部を洗いました。風邪で熱が出た際や二日酔いにはこの皮や枝を粥に入れて食べました。風邪が流行る際には枝を戸口や窓口に刺し、病魔除けとしました。木の掻き綿を温湿布の当て布の代わりにしたり、皮や枝を煎じてお茶としても飲みました。エゾノウワミズザクラもキキンニと呼び、ナナカマドと同様に利用しました。



・ノリウツギ（アイヌ語名：ラスパニ）

サビタとも呼ばれるユキノシタ科の落葉樹で、できものができて腫れた際に内皮を削り、袋などに入れてお湯を掛けて湿布をつくり貼りました。膀胱炎や便秘、肝臓、喉などの病気に枝を煎じて服用したほか、樹皮を煎じて疥癬の患部を洗うのに用いました。この木の皮をお湯の中に入れると粘り気が出ることからシャンプーと同様に洗髪剤としても用いたといます。銚の柄やキセルの材として使われるほか、火箸や櫛せんなどの炉辺の道具、仕掛け弓の矢柄や花矢の材としても用いました。



・ハナマス

(アイヌ語名: マウニ / オタロフニ (木) / マウ
(実))

バラ科の落葉樹で、産後に果実とエゾノリュウキンカの根を一緒に煎じて服用し、根を煎じて腎臓病や浮腫みなどに用いました。食用としては果実を生食するほか、茹でて魚油をつけて食べたほか、クロユリ鱗茎とあわせて餅のようにしてアザラシなどの油をつけて食べました。木を削り、煎じてお茶としても飲まれました。戸口にイケマの根やギョウジャニンニクの葉とこのハマナスの枝とイナウ(木幣)を添えて悪疫流行の際に立てたといえます。一般にはつぼみを下痢止め、疲労回復に用い、果実はジャムや果実酒にします。



・ハルニレ（アイヌ語名：チキサニノカラニ）

アカダモとも呼ばれるニレ科の落葉樹で、オヒョウと同様に内皮から繊維をとりアットウシの材料としましたが、繊維はオヒョウに比べ弱く、赤っぽい色をしています。繊維が柔らかいことから靴の中に履くケロルンペの材料や、赤や黒に染めるなどして莫産の文様を編み込むのに用いました。ハルニレは燃えやすいことから乾燥したものを発火器として、また、根を火口として利用した。洗髪の際にこの内皮を用いたといいます。



・ホオノキ（アイヌ語名：プシニ）

モクレン科の落葉樹で、果実を煎じて腹痛の薬として服用し、温湿布としても用いました。また、骨の節々が痛いときに樹皮を煎じて湿布にも用いました。果実は煮立ててお茶として飲用しました。ホウノキでつくった削り掛けに赤い布を巻いて首飾りとし、病魔除けとして用いました。刀の鞘や矢筒の材として広く用いられました。



参考文献

アイヌ民族博物館編 『アイヌと自然シリーズ

2 アイヌと植物 食用編』(1989)

” 『アイヌと自然シリーズ

3 アイヌと植物 樹木編』(1993)

” 『アイヌと自然シリーズ

4 アイヌと植物 薬用編』(2004)

アイヌ民族博物館、北海道立衛生研究所、白老町編

『しらおいで見られるアイヌ民族の有用植物
薬用・食用編 』(1996)

知里真志保著 『分類アイヌ語辞典第一巻植物
編』(日本常民文化研究所 1953)

山岸喬著 『北海道薬用図鑑野生編』(北海道新聞社1992)

佐藤孝夫著 『北海道樹木図鑑』(亜細亜社2000)

(4) 住む

住居《チセ》は、釘やネジを使わずに木の幹を柱とし、ヨシやカヤ、ササ、樹皮、割り板などを屋根や壁材としてを葺いて作られました。

チセの中には、中央入り口手前に炉が作られ、家族の座る場所、寝るところ、調理をする場所、宝物や儀式の道具を置く場所などが決まっており、概ね二世帯（親子）単位で暮らしていました。炉では24時間365日、火種を絶やすことはなく、夏でも炉内ではほのかに火を燃やしていたと言われています。火を焚くことによる地熱の上昇と、壁や屋根を葺くヨシやササが作る空気の層によって、《チセ》は外観から想像する以上に暖かく、一家団欒の場でありました。ただ、採光が不十分であったので、屋内は常に薄暗い。

こうした《チセ》は、復元されて現存していますが、今は実際にそこで人が生活することはなく、専ら伝承された儀式を行う場や展示施設として使われています。現在、アイヌの人々は、木造モルタル建ての家や豪邸にと、収入に見合ったごく一般的な家に暮らしています。

現在では、《チセ》を基にした生活様式が続けられていませんが、《カムイノミ》などの伝統的な儀式を今でも継承する人の中には、現在居住する家で、伝統的な《チセ》での宝物の置き場所に倣って儀式の祭具を安置するなど、かつての住文化の一端

が継承されています。

(5) 祈る

精神文化

アイヌの人々は、自然現象や動植物、人間の作る道具などのすべてに魂が宿り、神の国から使命を担って姿、形を具現するために降臨すると考えました。その中には、人間にとって有益なものだけでなく、奢りや風紀を粛清する天災や病気などもあり、人間の力の及ばないもの、事象などを神として敬いました。

人間は生活に必要なものを神から授かり、十分な庇護を受けることができ、その返礼の意味で心づくしの供物を供え、感謝を神様に捧げる儀式《カムイノミ》を行い、神はまた、人間からの声援を得て、一段と位の高い神になり、



相互の協力が平和な暮らしを永續させるものと考え
ていました。

従って、食べるもの、着るもの、住む家など、毎
日の暮らしに必要な有形無形のもの多くを、豊か
な自然の恵みの中から調達し、それらに手を加えて
充当しました。

日常生活の行動規範は常に神の存在を意識し、人
間にとって最も身近な神は、火の神といい、何事も
火の神を通じて儀礼が執り行われていました。生活
様式が大きく変わった今日でも、人間は自然の恵み
によって生かされているという認識を、民族文化の
基本として捉え、今もアイヌ文化の継承、発展に取
り組む人々の心のよりどころ、そして民族の誇りと
もなっています。さまざまな儀礼は世代を越えて継
承され、時には新たに創造し、復活再生されて、今
日に及んでいます。

神々への祈り

カムイ（神）には、たとえば風、太陽、月、海な
どがあります、又動物神ではクマ、キツネ、タヌ
キ、クマゲラ、タンチョウヅル、そして火、水、大
地などもカムイであると考えます。人間では及ばな
い力を持ちそれぞれ役目も持っています。そういつ
た存在をおおむねカムイと捉えて考えています。た
とえば、風の神が山に吹けば枯れ枝を落として人間
がそれを拾い集めて薪にします、海に吹けば海底の

ものを上にし、上のものは下にします、しかし、強く吹きすぎると家を壊したり、海難事故を引き起こしたりします。水の神は飲み水、煮炊きに洗い物、たくさん集まれば川の神となり、鮭やたくさんの魚を育てます。そして人間の重要な船での道となります、たまに鉄砲水になるのは水の神の通り道である谷間の大掃除をすると考えます。恵みの水も、場合によっては災害をもたらすことがあります。

火の神は特に重要でアイヌの暮らしの中心にあるものでアペフチカムイ、生活の神、育ての神と呼ばれます。煮炊きはもちろん寒い時の暖を人間に与え、人間が神々に祈る時にはその言葉を煙となって地上や天の国と、あらゆる場所に住んでいる神々に伝えてくれる役目を果たすものなのです。しかしその扱いを誤るとやけどをしたり、家が火事になったりします。人間にたくさんの恵みを与えてくれる海や山においても人間が油断したりすると事故にあったり死んだりします。ヒグマの神やキツネ、タヌキなどの神は毛皮と肉を土産として人間界へ持ってきて帰りにそれらを置いて帰るものなのです。

本来恵みであるクマの神を迎えにいったとしても（つまり、狩にいったも）逆にクマに襲われて怪我をしたり、あるいは命を失う事も有ります。人間を殺したりしたクマは悪いものといいうエン（悪い）カムイとして格式のあるものとしての扱いをしません。常日頃アイヌはそのような事にならないように

人間の暮らしが困らないよう感謝の祈りと共に供物と御神酒をささげ自らも神に対して恥ずかしくない人間となることを一生の目標として生きるのです。そうする事によって人間の暮らしの安全と恵みをカムイから受け取る事が出来、又カムイは人間から送られた品々によって神の国でより豊かになり位も上がりふたたび人間への恵みを与えているのです。

有名なアイヌの行事では、イオマンテ（その魂を天の国へ送る）が有りますが、クマ、タヌキ、キツネは、元々天の神の国に住んでいたカムイ（神）が、獣の姿を借りて地上に遊びにきています。心正しく清い人間の元にだけ獲物として来てくれます、人間アイヌは丁重にお迎えして、肉体と魂とを分けて（すなわち殺して）魂だけを天の国へ盛大に送り返す儀式がイオマンテ、と呼ばれる儀式なのです。

その他には新春を祝う、豊漁を願う、狩の無事を願う、結婚の報告、葬式誕生の報告、新しい鮭を迎える儀式、古くなって使えなくなった生活用具を神の国へ送る儀式、新築安全祈願など一年中暮らしのほぼ生活全ての場面でカムイの加護と感謝の儀式が執り行われ常にカムイ（神）との繋がりを持つ暮らし振りなのです。

<詳しくは>

・アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知

識』(草風館 1993)

- ・北海道立アイヌ民族文化研究センター 編
ポン カンピソシ 5 アイヌ文化紹介小冊
子 「祈る」

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/abc/hacrc/hp/05_005.htm

現在実施されているアイヌの儀礼の一部

開催時期	名 称	主 催	開催地
4月	祖霊碑祭	(社)北海道ウタリ協会音更支部	音更町
4月末	チブサンケ(舟おろしの儀式)	(財)アイヌ民族博物館	白老町
5月	チノミ シリ カムイノミ	旭川アイヌ協議会	旭川市
5月	イチャルバ 開進地区ウタリ先祖供養	(社)北海道ウタリ協会音更支部	音更町
5月上旬	春のコタンノミ	(財)アイヌ民族博物館	白老町
6月	ヌプリコロ カムイノミ	東川町	東川町
6月下旬	チセノミ	(社)北海道ウタリ協会札幌支部	札幌市
6月8日	銀のしづく降る日 知里幸恵生誕祭	旭川アイヌ協議会	旭川市
6月24日	第13回カムイノミ・イチャルバ	伊達市・(社)北海道ウタリ協会伊達支部	伊達市
6月30日～7月1日(予定)	「ウタリの森」パルトコタン祭り・オッパイ山祭り	オッパイ山祭り組織委員会	上士幌町
8月20日	チブサンケ(舟おろしの儀式)	チブサンケ実行委員会	平取町
8月下旬～9月上旬	春採コタン祭	春採コタン祭実行委員会	釧路市
9月	カムイチェップノミ	大雪と石狩の自然を守る会	旭川市
9月	しらおいチェブ祭り	しらおいチェブ祭り実行委員会	白老町
9月	ベッカムイノミ	(財)アイヌ民族博物館	白老町
9月頃(予定)	イチャルバ	(社)北海道ウタリ協会上士幌支部	上士幌町
9月2日(予定)	マレック漁とチサタップの集い	(社)北海道ウタリ協会上士幌支部	上士幌町
9月9日(日)	ベッカムイノミ	(社)北海道ウタリ協会登別支部	登別市
9月第1日曜日	アシリチェップノミ	(社)北海道ウタリ協会千歳支部	千歳市
9月中旬	アシリチェップノミ(新しい鮭を迎える儀式)	札幌アイヌ文化協会	札幌市
9月23日	こたんまつり	こたんまつり実行委員会	旭川市

開催時期	名 称	主 催	開催地
10月上旬～ 12月上旬	イオマンテの火まつり	イオマンテの火まつり実行委員会	釧路市
10月8・9 ・10日	まりも祭り	阿寒アイヌ協会	釧路市
10月下旬	秋のコタンノミ	(財)アイヌ民族博物館	白老町
1月6日(日)	アシリバノミ	(社)北海道ウタリ協会登別支部	登別市

財団法人アイヌ文化振興・推進機構編『アイヌ文化体験学習ガイド パイェアンロー』参照

4．歌や踊りと口承文芸について

(1) 芸能について

芸能として広く目にするのは、各地域に伝承されてきた「歌《ウポポ》と踊り《リムセ》」であり、観光地では、若干の休憩を取りながら、ほぼ終日踊り続けていますが、これは本来の姿ではありません。

歌も踊りも、起源は、日常生活を支えてくれる神々への感謝と希望を述べる神事のあとで、それらの神々へ奉納する余興の一部でした。その演出力は鎮魂、返礼、感謝の度合に比例するものであり、これは本州各地で見られる多様な祭り、盆踊りと共通するものです。

観光地では、そうした原形を理解していただきたいという意味で限られた時間内で披露しているのが現状です。

なお、今日では伝統的な芸能を基礎として新たに音楽や舞台劇を含めた多様な創作活動も行われており、世界に向けても発信しています。

歌には「座り歌」と「踊り歌」があって、後者には踊りが伴い、多くの観光地で見ることができます。歌い方は、独唱や合唱、輪唱などあって、基本的には、初めはゆっくりで徐々に加速していく。特に踊り歌には、その傾向が見られます。

座り歌は、2～6組に分れて歌を競い合うこともあり、2組に分れることが最も多い。歌詞はきわめて短いものですが、その数は数千に及びます。その

短い曲も時には、数10分から1時間以上にわたって歌われます。これは、同じ旋律で歌うのではなく、歌詞の一部を替えたり、多くは幾つかの音や拍数を微妙に変化させながら歌われます。まず先の歌い手（音頭取り）1人が、自分の持ち歌を歌い、残りの人がそれを聞いて、そっくり真似して歌います。次に、音頭取りが真似されないように歌い、残りの人がそれを良く聴きながら真似をします。

歌が上手であるという条件には、一般的に、声の良さや張り、節回しなどと思いがちですが、アイヌの人々にとっては、音頭取りの文句や音をしっかりと聞き取って、正確に再現する人こそが、歌の上手な人とされました。音頭取りが持ち歌を次々と変えても、それを再現することの共演で、優れた歌い手を多くの人が認めたところで、歌の競い合いが終了します。

こうしたことへのこだわりは、生活をする中で聞かれるささいな物音も、身の安全を保証し、そこから発信された情報を分析し、暮らしに活用することのできる能力を会得しなければならなかったからです。従って、歌や踊りの中には動物の鳴き声や動作を模倣したものが多く、そうした生態を広く知ることが、生きるための素材を自然界に求めていた人々にとっては、必要不可欠な要素でありました。

魔を払う「剣の舞《エムシリムセ》」、動物を捕獲する「弓の舞《クーリムセ》」、湿原で子育てする

「鶴の舞《サロルンチカプリムセ》」、様々な「鳥の舞《チカプリムセ》」などはその代表と言えます。

(2) 文芸について

アイヌの人々は、文字を使わずに、口伝えをもって聴き手を十分に理解させ、感性に訴えることで、主旨や微細な部分までも記憶させようと演出しました。文字だけでは、伝わりにくい部分を、確実に個々の脳裏に照射しておいて欲しかったからです。

親というものは、たとえ他者から非難を受ける子供であっても、吾子を一番いとおしく思うものです。親が生存中は、あれこれと親身に世話や相談は可能なものの、死後には直接手助けすることはできません。時代がいくら移り変わったとしても、人が人として共存する際に発生する様々な喜怒哀楽をはじめとする事象は、常に存在します。人生は決して甘いものではない、人としての悩みや苦しみは未来永劫に続き、その際の心のよりどころ志向の転換、適切な方向の暗示を、死んだ親に代わって示唆するのが語りの文芸でありました。

アイヌの人々は、詳細に話し、熱く語ってくれたことを思い出し、その内容と現状を比較しながら、幾多の苦渋や障害を乗り越えてきたのです。

話者の口からほとばしる対句や美辞麗句、雅な表現、奇想天外な物語性の他に、異界、霊界、超常現象などと組み合わせ、多様な筋立てに広く文学とし

て認められてきました。話し手、語り手、聞き手にとっては、文学と言うよりも社会生活を送る上での規範、人としての常識、賞罰の判断、生活の場となる自然界に存在する生態の実状を、正しく認識し、神祭りや儀礼の手順、病気への手当て、靈魂についての世界観など、生活に不可欠な具体的事例を、多種多岐にわたって満載した百科大事典に匹敵するものが、口承文芸なのです。

口承文芸の伝え方には、「話し」と「語り」とがあり、後者には個々に、また、個々人によって、特有の節（旋律）をもって語られる。節があるというのは、人間の話し方ではなく、種類によって様々な旋律（鳴声）をもつ神々の話し方であり、謝意を込めて神々へ語り聞かせるものには、全てに適合した旋律がつけられています。例を上げてみると、子守唄、童歌、作業歌、即興歌、哀愁歌などがそれぞれあり、物語に合わせて特有の折節（リフレイン）を持つ、神々の体験談《カムイユカラ、オイナ》や長篇の英雄の経験談《ユカラ、ユカル、サコロベ、ヤイラブ、ハウキ、ハウ》などは、叙事詩としてあまりにも有名です。今日ではその伝承者育成事業も各地域で試みられています。

(3) 各地の伝説

カムイコタン

昔、カムイコタンに住んでいた魔神ニツネカムイが、山の上から大岩を転げ落として石狩川を堰き止め、鮭の遡上を止めて上流に住むアイヌを困らせた。

これを見ていた山の神が大急ぎで、ニツネカムイの転がした岩の半分を爪で引掻いてこわし、どうにか水の流れるようにした。山に戻ったニツネカムイはアイヌたちが困っているだろうと見下すと、せっかくの岩を山の神がこわしているの、真っ赤になって怒り山の神に襲いかかった。

これを近くで見ていたサマイクルカムイの妹が、空知に行っていた兄に急ぎ知らせた。これを聞いたサマイクルカムイは怒って駈け戻り、山の神に加勢して大岩を取り除こうとしたので争いになった。ニツネカムイはついにたまりかねて逃げ出したが、泥にぬかってしまう。その足跡がオラオシマイ（鬼の足跡）、そのときにサマイクルカムイが刀で切りつけた跡が、エムシケシ（刀の傷）として残っている。さらに逃げるニツネカムイを追ってハルシナイ（食料のある沢）を過ぎてパンケアウシナイ（川下のオヒョウニレ群生する沢）の川口でとうとう首を切り落とした。ニツネカムイの胴体はそこで大岩になって残っている。切り落とされた首はその対岸に飛んでサイクリングロード下に奇怪な形の大岩と

なってどかっと坐っている（ニツネカムイサバ 魔神の頭）。ニツネカムイネトパケ（魔人の胴体）は、落石の危険防止のため「ニツネカムイ覆道」となっている。また、その前の川の中には低い岩が散らばっており、これが魔神のあばら骨である。

サマイクルカムイは、ニツネカムイが投げ込んだ大岩を取り除き、再び鮭が上れるようになった。

出典：由良 勇 著

『カムイコタンからチュブペツまでアイヌ語地名と伝説の岩』

イペタム・シュマ(人食刀岩)と、アサムサクト (底なし沼)

昔、上川コタンのコタンコロクル首長の家に、一つの刀がキナ(ゴザ)に包まれてカムイ・プヤラ(神窓)の上に吊り下げられていたが、代々先祖から「これは妖刀である。どんな事があっても開いてはならない」と言い伝えられていた。

ところがある夜、怪しい光とともに妖刀はカムイプヤラから音もなく姿を消した。朝になると刀は何事もなかったようにキナの中に収まっていた。このようなことが何日も続き、コタンでは、人々が不可解な切り傷によって死ぬという事件が続いた。

途方にくれた首長が妖刀を山深くもって行って捨てても、カムイコタンの深みに沈めても、刀は家に戻り相変わらず人々をおそった。

コタンコロクルは、カムイへ祈りながらも疲労のためいつしか眠りについた。すると、夢の中に、白髪の神と黒髪の神が現れてこう言った。

「妖刀からコタンを守るには、チウベツのホトゥイエパウシ(いつも大声で呼びつけている所)の崖下に沼がありその岸に赤い岩がある。その大岩の下にヌサ(祭壇)を設けて妖刀を祀って心こめて祈りなさい。そうすれば、私たちが助けよう。」

早速、首長は夢のお告げの通りにヌサを作り、刀を祀って命がけで祈った。すると、ものすごい轟音とともに岩が二つに割け、沼には湧きかえって白波

がたち、異様な気配が漂った。そのとき、コタンコロクルが「この刀がコタンにあってはアイヌが滅びてしまう。アイヌのために、この魔力を水神であるあなたに預けるから、しっかりと預かって頂きたい。もしこの願いを聞き入れてくださるなら、この刀を投げ入れるから、今、風もないのに沼に立っている波を消して誓って下さい。」と言って刀の包みを沼に投げ入れた。すると、異様な気配はすっかりなくなり、白波だと思っていたものは幾千としれぬ白蛇であった。それから、コタンには平和が戻った。

夢に現れた白髪の神は竜神のお使い、黒髪の神は山の神のお使いであったことを悟ったコタンの人々は以後、この赤岩でお祭りをするようになった。

そして妖刀を呑んだ沼をアサム・サク・ト（底なし沼）赤岩をイペ・タム・シュマ（人食い刀の岩）と呼ぶようになった。

出典：由良 勇 著

『カムイコタンからチュブペツまで
アイヌ語地名と伝説の岩』

まりも伝説

むかし、阿寒湖にペカンペ（水・の上に・あるもの＝菱の実）が群生していた。アイヌの人たちにとっては、大事な食料であった。ところが、トーコロカムイ（湖・の・神）は、ペカンペが湖一面にはりつめると、湖が汚れて見苦しくなり、アイヌがペカンペを取りにきて汚れるからと、ペカンペを快く思わず、絶えず虐待した。

ペカンペは、「仲間を増やしてアイヌの人たちの役に立ちたいから」と懇願したが、トーコロカムイに、にべもなく断られてしまった。それで、ペカンペは大いに怒って、そこら一帯の藻をかきむしり、それを丸めて湖の神に向けて投げつけて、自分たちはさっさと塘路湖（トー・オロ 湖・のところ）に引っ越してしまった。その丸めた藻が、今日言うところのマリモ（鞠の形をした藻）となったのである。

（平成12年発行「久摺第八集」の中から、山本多助談として掲載されていたもの）

有珠山の噴火

話者：遠島タネ（タネランケ）氏

昔から静かな大地、静かな村を領していた。ある日、地震が起こって大地が揺れるに揺れた。私は山の様子をみていたが何日も、何日も、地震がおさまらないので、村の住人である子どもやフッチ（おばあさん）、エカシ（おじいさん）たちを避難させた。しかし、アブタ（＝虻田）のかしら（村長＝むらおさ）は「わたしが」避難させた」と言っても（村人を）避難もさせないでいたのだった。ところが恐ろしいことに真夜中に噴火が起こり、熱湯が村中を飲み込み、岩とともに火が下り、アブタの村を飲み込んでしまった。村は破壊され、一人の人間も避難させなかったことから、全部消されてしまい何もかもが無くなった。（噴火が起きて）アブタの村から逃げ、海に逃げたものは、あわてて海へ飛び込み頭が焼け、海の底に潜ったものは哀れにも海水を飲んだのか腹を膨らませて死んだ。死んだものたちが浜一面に引き上げられ、ウソロ（＝有珠）の村はひどく破壊され、めちゃめちゃに焼かれ、家は燃えた木片が半分ぶら下がり、跡形もなく燃えてしまったものもあって、アブタの村はすっかり消えた。

そういう中、アブタの村、フレナイ（＝虻田）の村を治めるかしらが見つからないのを私は不思議だと思って、毎日、かしらを探したがわからない。フレナイの住人で逃げきれたものたちも、かしらが生

きているのか死んでいるのかわからないので、皆で泣いてリムムセ（叫び声）をしたが、どうしたものか行方がわからない。そうしているうち、ペペ（ベンベ＝豊浦）という村に逃げた人たちも自分の村に二人帰り、三人帰り、次々と村に戻った。（村へ戻ると）フレナイの村のかしらが、生前の姿のまま山へ向きながら座っていた。座って神に祈っていた。アイヌも和人もびっくりして口をおさえ、鼻を押さえ、哀れんだ。和人が近くに寄って「かしらよ、達者でいたのか」といいながら杖で突いたが、そのまま座っている。灰だらけで座っている。いつ、焼けたのか、生きているものと同じように、かしらも奥さんも座っている。虻田の村がどうなったのかと心配したアイヌたちや助かったアイヌたちが泣きながら威嚇行進をおこなった。ペペの村、レブンケの村の焼け殺された人びと全員の魂が、死んだ魂が神のところにいけるよう長老たちが神に語り、神に呼びかけた。

そうしていると、山（有珠山）を静めるためにウェイシリの上から神が立ち上がった。その神に続きフレスマからレブンケからペペの岬からと、辺りの山の上、岬の上からたくさんの神々が立ち上がって山へ攻撃している。稲光とともに宝刀が大きく揺れ、切りあってでもいるように神々が戦った。山の神が弱まったらしく、何の音もなく地震もすっかりおさまった。

アブタやウソロの村も（噴火で）すっかり消えたが、新しいかしらが仲間を分けて、方々に村をつくった。アイヌたちはフレナイの村に集まり、村をもってたくさんの酒を造り、神に返礼し、方々の神々に祈りを捧げた。（噴火によって）死んだアイヌたちの魂、その留まる魂の鎮魂のためにも酒を造り祈った。「だから私は今でもウエイシリの神に祈りますよ。レブンケブの神々、方々のたくさんの神々全部に祈ります。だからお前たちも覚えておきなさい。今は長いこと山が噴火することもないが、おまえたちも気をつけなさい。」と私はもう死ぬので、仲間たち、子孫たちに教えたのだとフレナイの村長が言った。

出典・参考：

志賀雪湖「遠島タネ媪の伝承～亮昌寺アイヌ語音声資料」『アイヌ民族博物館研究報告第4号（1994）

『物語虻田町史』によると有珠の再噴火は、寛文3年（1663）、明和5年（1768）、文政5年（1822）、嘉永6年（1853）、明治43年（1910）、昭和18年（1943）、昭和52年（1977）が記録されており、1822年文政の噴火の頃に「この時の噴火で、今の新漁港を中心としてあったアブタは壊滅的な打撃を受けてトコタン（廃村）とよばれるようになり、会所も今の神社の横に移り、ここ

は本来フレナイのコタンのあった所であるが、名前は前のアブタをそのままとって現在の地名アブタとした」とある。遠島氏の伝承でも噴火のためにアブタのコタンがすっかり消されてしまったと謡われていることから、文政の噴火を知る先祖から伝えられた話だと思われる。

「カムイラッチャコ（御神火）と登別温泉の神

白老コタンから見て西方、登別温泉の方向に当たって、昔は時々不思議な火が見えることがあった。アイヌはカムイラッチャコ（御神火ごしんか）と呼び、悪疫流行のお告げとしてとても警戒した。登別温泉の神は病を治す神であるから、悪疫流行の兆しがあれば山に火を点じ、あらかじめ知らせてくれるのだと言い伝えられ、この火を見れば疫病除けの祈りをしたという。白老アイヌは登別温泉の神を「ヌプルベッカムイタブカシエヌプルカムイ 登別の聖なる山頂を守る神」と称し、神の中でも特に大切な神としてヌサ（祭壇）に祀ったという。

「昔、アイヌモシリ（人間の国）に一人の女の子が生まれた。その子は世にも珍しいほど神々しく上品で綺麗な子どもで、両親の愛もまた一通りでなかった。村の人たちもこの子が成長したらどんなに美しいピリカメノコ（美しい娘）になるかと、寄ると触るとその噂で持ちきりであった。しかし、六、七歳の頃からガンベ（皮膚病の一種）にかかり頭から顔まで一面にひろがり、色々に手当てもし、あらゆる薬もつけたが治る様子もなくひどくなる一方で、両親はもちろん村の人びともカムイノミ（神への祈り）を続けたが、それも効き目がなく、後には目まで腐ってしまい二目と見られない形相となった。

この女の子が十七、八歳になる頃、ある日、神隠

しにでもあったように姿を消した。手を尽くして方々探したが、どこへ行ったか杳として消息が分からない。多分醜い自分の容姿を恥じて行方をくらましたのだらうということになり、両親も泣く泣く諦めていた。しかし、これは神があまりに女の子が綺麗なため、このままにしておいて人間の垢をつけられるのは惜しいと思い、病気でもガンベでもないのに他の人びとの目にはガンベに見えるようなさったことで、行方不明になったのも神の国に呼び寄せられ、その神の妻になったからである。

神の国で六人の女の子を生み、やがてその子たちが大きくなって、それぞれ神様の所にお嫁に行った。長女はヌプルペツ（登別）の奥の高い山にいてこの付近を守る神様となり、母が人間世界にいるとき、病気と見られ長い間苦労したのを思って、この登別温泉の主となり、世の多くの人たちのあらゆる病気を治してやる神となった。以来、アイヌはヌプルペツ温泉に入浴する場合、必ずこの神にイナウ（御幣）を捧げ、病気全快を祈祷した後、入浴するのが習慣となった。登別温泉はこの神のご利益で何病にも効くが、ことに母神の病気であった皮膚病には効験が一層あらたかであると言いつづられている。

なお、妹たちも、次女は小樽の祝津、三女は積丹のお神威、四女はエンルム（室蘭の絵鞆）、五女は室蘭の地球岬、六女はヤングウシ（矢越）に皆それ

ぞれ嫁ぎ、その守護神となったという。

出典：満岡伸一著『アイヌの足跡』（2003）

日高地方に伝わるアイヌの民話

日高地方では、古くからアイヌの人たちが暮らし、特色ある文化をはぐくんできました。たとえば、人と自然とのつきあい方や、生活の知恵が盛り込まれたユニークなお話がたくさん伝わっています。その中から、自然との共生をたいせつにした暮らしぶりが感じられる物語をご紹介します。

「プクサの神の怒り」

ある村に心がけの良いはたらきものの娘がいました。

畑で仕事をしていると、萩（はぎ）の神が娘に、村長（むらおさ）の家に行くようにささやきました。急いで行ってみると、村長の妻は重い病気になり、たったいま亡くなったばかりのところでした。

すると今度は、その家の鍋（なべ）の神が娘に、村長の妻が死んだ理由をそっと教えてくれました。

それは、村長の妻が、山でプクサ（ぎょうじゃにんにく）やほかの山菜をとるときに、いつも根だやしにとりつくしたので、プクサの神が怒り、誤りに気づかせようと重い病気にしたからだということです。

これを聞いた娘が、鍋の神が教えたとおりのおまじないをし、プクサの神の怒りをしずめると、村長の妻を生き返らせることができました。

助かった村長の妻は、娘の話を聞き、自分がしたことを悔いあらためました。

また、そのあと、娘はとても豊かになり一生幸せに暮らしたということです。

娘はよくはたらくうえに心がけも良く、山に山菜をとりに行っても、プクサなどをとりつくすようなことはけっしてしなかったので、いろいろな神が助けてくれたのでした。

だから、山菜とりに行っても、全部を根だやしにとるようなことをしてはいけませんよ。

このように、アイヌの昔話には、自然をたいせつにする精神を教えるものが多いのです。みなさんも、村長の妻のようには、ならないようにしましょうね。

* 萱野 茂 著『アイヌの昔話』(平凡社)を参考にしました。

キツネのチャランケ（談判）

サケが川をたくさんのぼってくるようになった秋の夜のこと、アイヌコタン（村）の長（おさ）が川辺を歩いていると、なにやら声がします。だれだろうと月明かりをたよりに目をこらすと、そこにいるのは一匹のキツネでした。キツネは村長に何かを訴えたがっている様子です。不思議に思いながらも耳をすましてよく聞くと、キツネが言いたいことがわかってきました。それは、こういうことだったので

「アイヌよ。人間よ。よく聞け。きょうのひるごろ、おまえたちアイヌがとっておいたたくさんのサケの中から一匹だけちょうだいした。それに気づいた一人のアイヌが、聞いたこともないような悪い言葉でののしった。それは、人間が言えると思うありったけの悪口だった。そのひどい言葉は、まるでどす黒い炎のようにおそいかかってきたのだ。

それにしても、サケは人間がつくったものではあるまいし、キツネがつくったものでもあるまい。川辺でくらしている生き物たちのために、神がたくさんのぼらせているものを、腹をすかせたキツネが一匹とったからといって、あの仕打ちはひどすぎるのではないか。」

これを聞いた村長は、キツネの言い分がももっとだと思いました。そして、朝になるとキツネの悪口を言った者を呼び、キツネの話を伝えてしかり、こ

れからはそのようなひどいあつかいをしないように教えさとしてました。また、村人が皆でイナウ（御幣）とお酒をキツネの神に捧げて、ていねいなお祈りをし、サケを自分たちだけのもののようにしたことをわび、これからはそのような振る舞いをしないことを誓いました。

「だからいまいるアイヌたちよ、魚や木の実はけっしてわたしたち人間だけが食べるものと考えてはいけない、と年おいた村長が語りながらこの世を去りました」。昔話の多くが、このような言い方で教訓を伝えながら終わります。

サケなどの自然のめぐみをほかの動物たちとも共有しようという、また一匹のキツネの主張に対してもまともに耳を傾けようとする、アイヌの人たちの伝統的な精神を伝えているお話の一つですね。

また、このような守るべき精神道徳をそなえた人を「アイヌ ネノアン アイヌ」、つまり「人間らしい人間」と呼んで尊敬するのが、アイヌの人たちの考え方なのです。

* 萱野 茂『キツネのチャランケ（談判）』、同『アイヌとキツネ』（2冊とも小峰書店）を参考にしました。

5. 言語について

(1) アイヌ語

アイヌ語は、アイヌの人々が日常に用いていた言語です。これまでに様々な説はあるもののその系統は不明です。

文法構造は世界に共通する古い形式（特に東北アジアに分布するもの）であり、音韻（母音5音、子音11音と極めて音数が少ない）や発音数、使用上での意思、感情表現など最も近い言語は日本語とされています。ちなみに、日本列島の周辺にあって、関係の不明な言語は日本語、韓国語（朝鮮語）、ニブフ語そして、アイヌ語です。

また、歴史上の経緯から日本語からの借用や応用した語彙数も多く、古いものは律令国家（奈良）時代の原義と発音を今日に伝えています。

明治以降に北海道などへ本州からの入植者が一挙に急増すると、社会の主要な共通言語は日本語となり、アイヌ語の使用はアイヌの人々が暮らす村や家庭に限られました。学校教育でも、アイヌ語を用いずに日本語の授業を推し進めたので、その普及は目覚ましいものでした。

さらに、アイヌ語の構成音数と発音が日本語と酷似していたこと、文法構造がほぼ同じであること、日々の暮らしの慣習、躰、仕草などに共通性が多いこと、神祭りや死者への供養などを心底からとりおこなうなどの文化要素に共通性を認めたことは、未

就学の人々にも日本語が浸透する要因にもなっていた。従って、今日では、自分の伝える日常言語は、全て日本語であって、アイヌ語は口承文芸、歌舞、神事での祈り言葉、民具名称および、その素材名などに、使用されているだけで、アイヌ語は、社会言語（日常生活で使用する言語）として通用していない。

アイヌ語は100年以上にわたって凍結保存された感があります。しかし、自らの文化に対してその意義を認め合う傾向の盛り上がりと共に、アイヌ語を守り伝え、広める復元の間として、1988年から北海道内の各地にアイヌ語教室が開催され、今日では、旭川市、浦河町、帯広市、釧路市、札幌市、様似町、静内町、白老町、白糠町、千歳市、苫小牧市、登別市、平取町、むかわ町の14教室が開設されています。

さらに1987年からは、北海道内のラジオ局を通じて、アイヌ語講座が放送され、それ用のテキストも印刷されています。

現在では、たまに個人的な年賀状や電子メールなどにアイヌ語による意思伝達も行われています。

これまでのアイヌ語表記は、筆録者によって記載方法に違いが見られていましたが、より正しく理解するために、今日ではローマ字および、カタカナの併記によって共通に表記し、相互に読み書きの再生も可能となったが、今後検討すべき問題点も尚残されています。

(2) 文字

アイヌの人々が借用文字（日本語）によって記録し始めたのは、江戸時代中期ですが、現存するものは明治末期のものが最も古い。

江戸期にあっては、幕府の役人、北方警備に当たった武士、商人に雇われて漁場に勤めた番人や、通訳などによって、貴重なアイヌ語や文化内容が書き残されていますが、その種類や内容は、今日に筆録、収録されたものと全く一致します。

アイヌの人々は、文字を持ちませんでした。世界に居住する人々が話す言語 8 千～1 万語に対し、文字を使用している言語は、僅かにその 8 % にしかあたりません。しかも人類が地球に誕生して 5 百万年ともいわれますが、文字を使用し始めてから、5 千年の歴史しかありません。文字は人類にとって相手に意思を伝え、往時の現状を記録する道具として最も新しく創造されたものです。

日本列島において常用する文字も、その起源は中国にあって、すべてをそこに依存し、借用した文字の応用で筆録していることを改めて自覚していただきたい。

文字の起源は商業取引にあって、品名、数量、生産地、売主、渡主、買主、日時などを確実に記録することで、正確を計ることにあつたと言われていいます。

文章は実態を象徴しますが、逆に書き残したい当

人にとっては、不要な部分を削除することができ、大意で自分に都合の良い様に、時には優位な描写も可能であり、それをもって自らの証拠、証明とすることもでき、さらには、人の心を傷つける恐ろしい道具ともなります。

アイヌの人々は、文字を発明や工夫、借用や応用をしなかったのは、それを必要とする社会体制（例えば、国家や政治など）になかったからであり、相手に対し、虚偽や隠ぺいなどを一切排除し、何事にも公明正大で、常に真摯な態度で相互に対応し、協力し合うことの必要な社会であったから、文字の誕生はなく借用の需要もまったく不要でした。

6. 地名についての由来や意味

人が暮らしてきた土地には、その土地で暮らした人が呼びならわしてきた川の名や道の名、町や集落の名など、様々な地名があります。現在の北海道にもたくさんの地名があります。

その多くは、アイヌ語に由来するものです。例えば、北海道には「登別」や「稚内」のように「べつ」や「ない」のつく地名があちこちに見られることは良く知られています。

これらはいずれも、アイヌ語で川や沢を意味する「ベツ」や「ナイ」に関係する地名です。

アイヌの人たちの伝統的な暮らしの中では、川は交通路としても食料などを得る場所としても大切な存在だったことから、川の様子や特徴、暮らしとの関わりなどを表す地名が多く残っていると考えられます。

このように、アイヌ語の地名は、何らかの必要に応じて付けられたものであり、当時の人たちの暮らしが反映されています。

アイヌ後に基づく地名があちこちに多く見られるのは、その土地に昔からアイヌ語を話す人々が暮らしてきたことの何よりの証でもあります。

色々なアイヌ語地名

地形などを表す地名

川や湖、崖や岬、海岸などの地形を表す言葉に、

その性質やありさまを示す言葉がついて、実際の地形の様子やそこに暮らす人々から見た特徴などを表したと思われる地名が数多く見られます。

湖・沼

- ・茨戸 ばらと（札幌市）：パラ・ト「広い・湖」
- ・洞爺 とうや（洞爺村）：トー・ヤ「湖・岸」

川・沢

- ・本別 ほんべつ（本別町・鹿部町など）：ポン・ペツ「小さい・川」
- ・内淵 ないぶち（名寄市）：ナイ・ブツ「川・口」

崖

- ・平岸 ひらぎし（札幌市、芦別市）：ピラ・ケシ「崖・（の）端」
- ・平賀 ひらが（日高町）：ピラ・カ「崖・（の）上」

砂浜

- ・歌棄 うたすつ（寿都町）：オタ・スツ「砂浜・（の）根本」
- ・オタモイ（小樽市）：オタ・モイ「砂浜・（の）入り江」

滝

- ・層雲別 そううんべつ（上川町）：ソ・ウン・ペツ「滝・ある・川」

- ・渚滑川 しょこつがわ（滝上町～紋別市）：
ソ・コツ「滝・くぼみ（滝壺）」

その他

- ・発足 はったり（共和町）：ハツタラ「淵」
- ・遠軽 えんがる（遠軽町）：
インカラ・ウシ・イ「眺める・いつもす
る・ところ」

動物や植物に関係する地名

動物に関する地名

- ・幾寅 いくとら（南富良野町）：
ユク・トウラシ・ペツ「シカ・登ル・
川」
- ・磯分内 いそぶんない（標茶町）：
イソポ・ウン・ナイ「ウサギ・いる・
沢」
- ・近文 ちかぶみ（旭川市）：チカブ・ウン・イ
「鳥・いる・ところ」
- ・美馬牛 びばうし（美瑛町）：
ピパ・ウシ・イ「カワシンジュガイ・
多くいる・もの（川）」

植物に関する地名

- ・鬼斗牛 きとうし（旭川市）：
キト・ウシ・イ「ギョウジャンニク
・多い・ところ」
- ・蘭越 らんこし（千歳市）：

ランコ・ウシ・イ「カツラの木・群生する・ところ」

- ・多度志 たどし（深川市）：タツ・ウシ・ナイ「樺・群生する・川」

人々の暮らしに関係する地名

交通路などに関する地名

- ・留辺蘂 るべしべ（北見市）：
ル・ペシ・ペ「道が・それに沿って下る・もの」

狩猟や採集に関する地名

- ・久保内 くぼない（壮瞥町）：
ク・オ・ナイ「仕掛け弓・多くある・沢」
- ・浦士別 うらしべつ（網走市）：
ウライ・ウシ・ペツ「梁・ある・川」
- ・厚軽臼内 あっかるうすない（月形町）：
アッ・カラ・ウシ・ナイ「オヒョウの樹皮・（を）とる・いつもする・沢」

信仰や儀式に関する地名

- ・乳呑 ちのみ（浦河町）：チ・ノミ・シリ「我ら・祈る・山」
- ・幣舞 ぬさまい（釧路市）：
ヌサ・オマ・イ「祭壇・ある・ところ」

<引用>

- ・北海道立アイヌ民族文化研究センター 編
『ポン カンピソシ 9 アイヌ文化紹介小冊子 「地名」』
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/abc/hacrc/hp/05_005.htm

<詳しくは>

アイヌ語地名の概説書、入門書

- ・北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室
(編)「アイヌ語地名ハンドブック」2001年
- ・山田秀三「アイヌ語地名を歩く」北海道新聞社 1986年
- ・知里真志保「アイヌ語入門 - 特に地名研究者のために - 」復刻：北海道出版企画センター
1984年(初版1956)

アイヌ語地名の専門書、資料集

- ・山田秀三「アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集」(全4冊)草風館(新装版)1995年
- ・山田秀三「東北・アイヌ語地名の研究」草風館 1993年
- ・山田秀三「アイヌ語地名の輪郭」草風館1995年
- ・山田秀三(監修)佐々木利和(編)「アイヌ語地名資料集成」草風館 1995年

7. イオルの再生について

平成8年、国のウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会の報告書において、アイヌ文化の保存・振興と国民の理解を促進するための新しい施策が提案されました。

その一つに、アイヌの伝統的生活空間「イオル」の再生があります。

本来、「イオル」はアイヌ語で「イウォル」あるいは「イウォロ」と表記され、狩場、山菜などがとれるところを意味します。カムイとアイヌが直接出会うための場所ともいえます。

現在進められている「イオル」の再生とは、川筋や水辺を中心に一定の広がりをもった自然を基盤に、暮らしに必要な素材を採取、利用してきた場所をイメージし、それを現代に再現するのに必要な自然空間と文化の伝承を行う施設を総合的に整備しようとするものです。

イオルでは、植物の採取、栽培や魚類・動物の捕獲、保護が行われ、ここで得られた自然の素材は伝統的な手法のもとに加工、調製、利用、保存など一連の工程が行われ、工芸技術の実習、実演、体験交流、情報の発信など様々な文化的営みが継続的に展開することができます。

イオルの再生にあたっては、道では「伝統的生活空間の再生構想の具体化に向けて」（平成14年）において、その適地として次の地域を選定しました。

中核イオル

白老地域	白老中核イオル整備構想及び基本計画	H16 .3
------	-------------------	--------

地域イオル

札幌地域	札幌のイオル構想	H10 .8
旭川地域	大雪イオル（仮称）設営企画書（基本案）	H15 .6
平取地域	沙流川流域における伝統的生活空間整備構想	H 9 .10
静内地域	伝統的生活空間の再生に関する基本的な考え方	H11 .6
十勝地域	「アイヌ民族のトカプチミュージアム」 地域イオル構想	H11 .11
釧路地域	（仮称）アイヌ文化公園 「野外博物館アイヌコタン」	

国が主宰するアイヌ文化振興等施策推進会議では、平成16年に学識経験者やアイヌ文化伝承実践者からなる検討委員会を設置し、翌17年7月に報告書が出されました。

現在、イオルの再生に関する基本的な構想が定められ、平成18年度から白老町で先行的に事業が展開されています。

<詳しくは>

- ・アイヌの伝統的生活空間の再生に関する基本構想（平成17年7月）アイヌ文化振興等施策

推進会議 国土交通省北海道局

<http://www.mlit.go.jp/hkb/ainu/index.html>

- ・パンフレット「アイヌの伝統的生活空間 イオルの再生に向けて」

社団法人北海道ウタリ協会編

8 . 人口の推移

かつて蝦夷地と呼ばれた北海道を中心とする北方四島地域には、アイヌ民族が先住していました。

新北海道史（第九巻史料三）によると、明治の開拓使以後から昭和11年までのアイヌの人口は、1万5千人～1万8千人（別表参照）と記されています。

また、北海道がアイヌ民族の生活向上を図る施策の成果を測る「生活実態調査」が、昭和47年から7カ年毎に実施されていますが、この調査に公表されている、アイヌの人口は、23,767人（平成11年度）です。

平成元年に東京在住のアイヌの人口が公表されていますが、この調査では推定で2,700人とされています。

何らかの理由によって、北海道の地を離れたアイヌの血を引く人たちは、東京以外にも居住していますが、これまでに全国的なアイヌ民族の人口調査は実施されていないため、その人数は明らかではありません。

先の二つの人口調査は、自らアイヌであると自発的に表明した人数であり、自らアイヌを表明しない人は含まれていません。

これまでの差別や侮蔑、偏見にさらされた経験などから、自らアイヌを自覚していてもそれを表明することを躊躇する人もいることから、実際の数とはま

だまだ多いと考えられます。

道の実態調査では、未だにアイヌに対する差別や偏見が解消されていない現状が報告されており、社会全体の人権意識、感覚の成熟が求められています。

アイヌ民族の最大組織である「社団法人北海道ウタリ協会」では、平成18年12月1日現在で51支部、支部会員は全道で3,925人（家族を含めると1万数千人）とされています。

このように、過去の記録や史料、地方行政が行った調査、「北海道ウタリ協会」の会員等の数字をもとに、少なくとも数万人は存在するといえます。

潜在するアイヌ民族は数十万人、またそれ以上いるともいわれており、人口数値に幅があります。

<詳しくは>

- ・新北海道史 第9巻資料編3 北海道 昭和55年11月発行
- ・平成11年北海道ウタリ実態調査報告書
北海道環境生活部 平成12年3月

年次	アイヌ	全道	備考
1873 (明治6)	16,272	111,196	「開拓使事業報告」
1878 (" 11)	17,098	191,172	"
1883 (" 16)	17,232	239,632	「北海道庁統計書」
1893 (" 26)	17,280	559,959	"
1898 (" 31)	17,573	853,239	"
1903 (" 36)	17,783	1,077,280	"
1908 (" 41)	18,017	1,446,313	"
1913 (大正2)	18,543	1,803,181	"
1918 (" 7)	17,619	2,167,356	「新北海道史」第9巻
1920 (" 9)	16,720	2,359,183	国勢調査
1925 (" 14)	15,340	2,498,679	「新北海道史」第9巻 / 国勢調査
1930 (昭和5)	-	2,812,335	国勢調査
1931 (昭和6)	15,969	2,746,042	「新北海道史」第9巻
1935 (" 10)	-	3,068,282	国勢調査
1936 (" 11)	16,519	3,060,577	「新北海道史」第9巻
1970 (" 45)	-	5,184,287	国勢調査
1972 (" 47)	18,298	5,205,000	ウタリ生活実態調査 / 国勢調査の補正
1975 (" 50)	-	5,338,206	国勢調査
1979 (" 54)	24,160	-	ウタリ生活実態調査
1980 (" 55)	-	5,575,989	国勢調査
1985 (" 60)	-	5,679,439	国勢調査
1986 (" 61)	24,381	-	ウタリ生活実態調査
1990 (平成2)	-	5,643,647	国勢調査
1993 (" 5)	23,830	-	ウタリ生活実態調査
1995 (" 7)	-	5,692,321	国勢調査
1994 (" 11)	23,767	-	ウタリ生活実態調査
2000 (" 12)	-	5,683,062	国勢調査

9．北方領土について

北海道の東に隣接する、国後島、択捉島、色丹島、歯舞諸島の島々は、現在ロシアが占拠し、日本から自由に往来することができません。

日本政府や北海道庁はこれらの島々を「北方領土」「日本固有の領土」として、その領有権を主張し、ロシアに対して返還交渉を行っています。

この島々を巡っては、17世紀にかつて蝦夷地と呼ばれた北海道、北方領土に居住したアイヌ民族がラッコの皮を松前藩主に献上したとの記録が残されています。

また、松前藩は、1754年に国後島に場所（交易の場所）を開設、商船を送り込み、厚岸、国後を拠点とするアイヌとの交易が活発となったことも記されています。

18世紀以降、ロシアが千島列島を南下し始めると、幕府は対ロシア政策として蝦夷地を二度にわたって直轄しました。

また、幕府は1798年、エトロフ島に近藤重蔵を派遣し、「大日本恵登呂府」なる標柱を建てて、同島が日本の領有権に属することを内外に示しました。

後の1811年、国後島に立ち寄ったロシアのゴローニン船長らを南部藩が捕らえたり、翌年には、高田屋嘉兵衛がロシア船に捕らえられたことを契機に、1813年、日ロ両国間で国境を決める交渉が始まりました。

交渉の末、1855年に「日魯通好条約」が結ばれ、日露間の国境は、択捉島とウルップ島の間とされました。以後、千島樺太交換条約（1875）、日露戦争後のポーツマス条約（1805）、サン・フランシスコ平和条約（1951）の調印を経て現在に至っていますが、これらの条約には北方四島は含まれず、他国に属したことがないというのが返還運動の根拠になっています。

この「北方領土」の返還運動については、アイヌ民族の立場を考えることも必要です。

本来、これらの島々は、かつて「蝦夷地」と呼ばれた北海道と同様にアイヌ民族が先住していた大地であり、アイヌ民族は、この大地に根ざした独自の生活・文化を育み、隣接する島々を自由に往来していました。今もアイヌ語地名が北海道や北方四島内に点在していることから知りうるができます。

松前氏が率いる松前藩の運営は、北海道、北方四島に居住するアイヌとの交易の独占権、本州域からの渡航する商船に対する課税権により維持していました。

幕藩体制のもとにアイヌ民族は過酷な労働を強いられましたが、この大地に先住していたアイヌ民族と松前藩の間で蝦夷地（北海道・北方四島を含む大地）の地権に関する交渉や協議、証文を取り交わしたという記録は残されていません。

後の明治政府の成立によって、これらの広大な大地「蝦夷地」の開拓を目的に、移住者、資産家、企業が多数を占め、アイヌ民族の生活基盤が脅かされました。さらに、土地所有に関する規則を設け、アイヌ民族から大地を奪い取りました。

このように、アイヌ民族の歴史や土地に関する権利を顧みることなく領土問題が取り上げられていることに対し、アイヌ民族の最大組織である北海道ウタリ協会では、昭和58年5月に「北方領土」問題に関する基本方針を次のとおり表明しました。

- 1．政府及び道は、徳川幕府による開発以前の全千島における先住者であるアイヌ民族の地位を再確認すること。
- 2．政府及び道は、「北方領土」に関連し、北海道についても先住者がアイヌであったという厳然たる歴史的事実を明確にすべきこと。

現在も日本政府（北海道庁を含む）とロシアとの間で、協議や交渉が継続されていますが、アイヌ民族を含めた交渉は今日までありません。

北海道ウタリ協会では、アイヌ民族の立場から先住全域の歴史的な実証資料の確認とともに国内外にむけて正しい理解と認識を求めています。

このように「北方領土」問題については、「アイヌ民族」と「北海道を中心とする北方開拓（植民地化）」に深く関係していると理解することが必要です。

<詳しくは>

- ・千島列島のアイヌ民族先住に関する資料
（社団法人北海道ウタリ協会）1987 5
- ・先駆者の集い（社団法人北海道ウタリ協会
105 .106合併号）
研究論理と先住民族アイヌの人権 / 加藤 忠
- ・アイヌ民族の歴史と文化 山川出版社
2000 8
- ・アイヌの歴史と文化Ⅰ・Ⅱ 創童社 2003 /
2004 榎森 進編
- ・別冊太陽 先住民 アイヌ民族 平凡社
2004 .11
- ・北海道 / 北方領土対策本部
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/hrt/index.htm>
- ・われらの北方領土 2005年版 外務省国内広報課
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/hoppo6.html>

10. 工芸、民芸品について

物には必ず製作と共に魂が宿り、必要な形体を人間に作らせ、自らが製作した道具も他から交易によって奨励された道具も、共に生あるものとして大切に取り扱いました。

使用に耐えなくなった道具は、祭壇で丁重な感謝の言葉や供物を添えて、その魂を神の国（あの世）に送り返しました。北海道に植生する樹木の堅さや重さなど、その素材の特徴を活かして、日常生活に使用された道具類は、利用する人のことを考えて、機能性が高く、また、感謝の念を表現して造形的な美しさも併せ持っています。

祖先伝来のモノ作りの精神は、今も様々な技法を持って生かされています。民具は本来、日常生活に必要なものを製作するのであって不特定多数の人々へ民芸品（木彫熊、ニポポなど）として提供することは厳しく戒められていました。

北海道の木彫工芸品は、生活用具に始まり、今日も日常生活に適用する必要な民具が創作されています。その一方で、北海道への交通網が発達するにおよんで、風光明媚な大自然への観光を視察旅行に兼ね合わせ、訪れた場所への思い出や記念の品物として、明治時代中期には、土産品の需要が高まりました。北海道にあっては、新興する状況を示す絵葉書を初め、アイヌの人々の暮らしや文化を紹介する絵葉書、さらには、スイスでは子供の玩具として作成

されていた小さなクマの彫刻を、八雲町に持ち帰ったものを複製したのをきっかけに旭川をはじめ各地で製作され、爆発的な需要に対応してきました。

昭和後期からは、北海道という地域に根差した幅広い木彫工芸制作活動が始動し、民族的感性を表現した芸術作品が生まれ、室内や店内などの装飾用レリーフ、タペストリーの製作、様々な商品へのデザイン化などに、傑出した作家として活躍する人々も誕生しています。

11. アイヌの人物紹介

川村 カ子ト かわむらかねと

(1893年～1977年)

川村イタキシロマ、アペナンカの長男として旭川市永山町に生まれる。カネト誕生の翌年、一家は近文に移住。祖父の川村モノクテは、旭川地方のコタンコロクル(首長)。

伝統的な生活を禁止されていく中で、職業に就く必要から15歳から鉄道敷設予定地測量工夫に従事した。25歳のときに、鉄道員旭川建設事務所測量工手、後に建築工手に採用され道内各線の敷設予定地の測量を行った。その後、朝鮮半島、樺太(現サハリン)、長野県などで測量を行う。昭和初期のこと、長野県と愛知県を結ぶ飯田線(当時は三信鉄道)は、その線内に天竜峡という険しい渓谷があったためになかなか開通できなかった。アイヌの測量隊の話聞いた三信鉄道の依頼で、長野県で測量と敷設工事の現場監督も勤め、苦難の末、昭和12年飯田線を見事開通した。

大正末期から昭和初期にかけて近文アイヌの生活向上のために、民芸手工芸組合やアイヌみやげ品企業組合を設立した。

カネトの本当の名前はカネトウツカイヌ(金を稼ぐ人)、その名の通り測量の仕事で財をなし、三階建ての洋館を建て、周囲を驚かした。

「人は金のために仕事をするのではない。人のた

めに仕事をするのだ」

と語り、私財を投じてアイヌ文化の正しい理解を求め、アイヌ記念館を設立した。

第二次世界大戦後はアイヌ文化伝承に力を入れ、79歳のときには、アメリカ、シカゴで開かれた第9回国際人類学会議に招かれ、自ら撮影した16ミリフィルム「アイヌ生活実態」を発表した。晩年は、アイヌ記念館で観光客にアイヌ文化を丁寧な解説した。その風貌からは想像できない優しい口調であったという。

杉村 キナラブック すぎむらきならぶつく

(1888年～1973年)

父、稲高トンピン、母イトモシマツの間に深川イチャンで生まれ、2歳のときに雨籠フシコ・コタンに移住、同地で育つ。幼い頃の暮らしはアイヌ伝統のものではあったが、和人の風習を受け入れなければならない現実との葛藤の時代であった。両親はアイヌの暮らしが変わらざるを得ない状況下で、彼女の希望する「学校」へは通わせず、兄弟姉妹の中で一番頭の良い彼女には、アイヌの風習を教えた。

18歳のときに旭川チカプニ・コタンの杉村コキサングルと結婚したが昭和10年、事故で夫をなくした。第二次大戦中、戦後と幼い子を抱えて苦しい生活を送られてきたが、後年は幼少の頃より培われたアイヌ文化をアイヌ、和人の区別なく伝えてきた。現在彼女の残した口承文芸は100を超え、今日アイヌ語の学習をするのに役立てられている。

キナラブック(キナ・ラブ・ウク)という名前はアイヌ語でガマの穂を取るという意味。赤ん坊のときに、その手にガマの穂をつかんだことから、器用な子に育つであろうと名づけられた。その名の通り、ガマを使って作られる模様入りのござ、チタラベ織りの名手であった。他に、エムシタラ(刀の帯)、ヤイサマ(即興歌)の名手でもあり実に多岐に渡る、アイヌ文化の伝承者であった。

金成 マツ かなりまつ (1875年～1961年)

幌別コタン(現登別市)のコタンコロクル(首長)ハウエリレと、モナシノウクの長女として生まれる。アイヌ名はイメカニ。彼女は幼少の怪我で足が不自由となり、結婚をあきらめてキリスト教の伝道師として生涯を生きる決意をした。しかし、この不幸な出来事が幸いにも後年ユーカラの筆録に余生を捧げる運命に彼女を導いた。少女時代に、妹ナミとともに函館にあった聖公会のアイヌ伝道師養成の愛隣学校で教育を受けた後、日高管内平取コタンで12年間、旭川町(現旭川市)近文コタンにて約20年間伝道活動を行った。それは単なるキリスト教の伝道所ではなく、コタンの女性たちの集会所のような存在であった。コタンの女性たちにユーカラの伝承や、文字を教えたり、新聞や雑誌の紹介など当時のコタンの人が知らない世界がそこにはあった。近文では金田一京助が絶賛したユーカラ伝承者である母親のモナシノウクが、足の不自由な彼女の身の回りの世話をするため同居し、さらに姪の知里幸恵を進学のために引き取って養育した。また近文コタンのユーカラの名手、川村ムイサシマツも度々彼女の伝道所にやって来ては互いにユーカラを語り合ったという。

布教活動を退いてからは、故郷の登別にて母から伝承したユーカラなどを愛隣学校で学んだローマ字で筆録し、金田一京助氏と甥の知里真志保氏に合わ

せて実に160冊にものぼるノートを残した。その一部は、金成マツ筆録、金田一京助訳注『アイヌ叙事詩ユーカラ集』として出版されている。彼女がこのような偉大な仕事を為し得たのは、姪で養女の幸恵が無念にも志半ばでこの世を去り、果たせなかった仕事の重大さに気付いたからであった。

知里 幸恵 ちりゆきえ（1903～1922）

登別の名家、知里高吉と、金成マツの妹ナミ（アイヌ語名、ノカアンテ）の子として生まれたが、6歳で旭川の近文聖公会伝道所にいた叔母の金成マツのもとへ引き取られ、19年というあまりに短い生涯の大半を旭川で過ごした。

学校での幸恵は非常に優秀で、成績は常にトップであった。また下級生の面倒を良く見るとても優しい人であったという。生まれつき心臓に欠陥があり、体も弱かったが14歳から17歳までの3年間、「旭川区立職業学校」へ4キロの道のりを徒歩で通った。旭川の厳しい冬の中、急ぎ足で通った道のりは彼女の体を蝕んでいった。

彼女が15歳の夏に、文学者の金田一京助が、近文伝道所に金成マツ、モナシノウクを訪ねてきた。金田一は、彼が最高のユーカラクル（叙事詩人）であると絶賛するモナシノウクを訪ねたが、幸恵と出会い彼女の文学に於ける並々ならない才能に感嘆した。また彼女は、アイヌ語と日本語を巧みに操る才

能も持っていた。幸恵は金田一に「アイヌのユーカラが価値のあるものなのか」と尋ねた。すると金田一は「ユーカラとは、アイヌの祖先の戦記物語であり、詩の形でうたい伝える叙事詩という文学であり、ギリシアの『オデッセイ』『イーリアス』とならぶ、大変貴重なものである。叙事詩というものは民族の歴史であり文学であり、宝典でもあり、聖典でもある。これを書きとめ残すことは大変重要なことである」と、説いた。そして幸恵は生涯をアイヌ語研究に費やす決意をした。

卒業後、金田一からノートが送られ、幸恵はアイヌ語の表記にはローマ字が適していることを発見し、養母のマツからその綴り方を習いモナシノウクから伝い聞いた「アイヌ伝説集」を書き上げ、金田一に送り返す。これがアイヌ自身の手による最初のアイヌ語筆録である。さらに、「アイヌ伝説集2・3」を書き続けた。金田一の熱心な勧めで上京を決意し、1922年19歳の幸恵は、金田一宅へ赴いた。不慣れな土地で気を使いながらも、『アイヌ神謡集』を書き上げ、無理がたたって体をこわし、ついに帰らぬ人となった。

「その昔この広い北海道は、私たち祖先の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく暮らしていた彼等は、真に自然の寵児、何という幸福な人たちであつたでしょう。……」で始まる『アイヌ神謡

集』の序文、その清らかな魂の表現、美しい言葉は、今もなお人々の心を捉えて放さない。

かつて彼女が通った尋常小学校（現旭川市立北門中学校）に、彼女を偲んで地元のアイヌ有志によって文学碑が建立された。また、毎年6月8日彼女の生誕の日に「知里幸恵を偲ぶ会」が、同地に於いて地元アイヌ有志と、中学校によって開催されている。

山本 多助 やまもとたすけ

（1904年～1993年）

1904年（明治37）年7月5日 釧路市春採（はるとり）コタンに生まれる。

若干18歳で樺太に渡り、シベリア沿海州の黒龍江流域の地名と、先住民の言語調査を行ない、アイヌ民族と周辺民族との関わりを研究。

1935年（昭和10）年、屈斜路湖畔で木彫り民芸品店自営、先駆的役割を果たした。

1952年（昭和32）年「アイヌ、モシリ」を発売以来著書多数、アイヌ民族のことはアイヌの手で、という事で精力的に民族解放運動に参加、ドッコイアイヌは生きてると当時社会的に無視されつづけたアイヌから民族自立と差別撤廃を叫びつづけた。

1976年 阿寒湖ユーカラ座からユーカラクル（語り部）役として招かれ、パリのユネスコ本部のジャパンフェスティバルで公演し、国際的に大きな反響

を呼んでいる。

1978年平凡社発行の「怪鳥フリー」は代表作で全国図書館協議会、中央児童図書審議会から指定を受けた。

1985年 アイヌ文化振興の功績が認められ北海道から、北海道文化賞が授与された。

多助翁は、北海道開拓という侵略行為に、和人は赤鬼青鬼と言い放ち、いかにアイヌが開拓の美名の元に辛酸を舐めたか、いかに絶滅の淵まで追い詰められたかを齒に衣着せぬ言動で訴えつづけた人権の人であった又、その精力的な活動により多くのアイヌ民族同胞の精神的支柱となっていた。

1993年 享年89歳 没。

床 ヌプリ とこぬぶり (1937年～)

1937年釧路春採(はるとり)に生まれる。現在、釧路市阿寒湖温泉アイヌコタン在住。

氏は、木彫家であり演出家でもある。幼少の頃、父の友人であった故山本 多助エカシと出会い、中学を卒業後弟子入りする。後に本格的に木彫りを習得するため旭川へ行き木彫り熊などの手ほどきを受けた後、阿寒へ移り住みアイヌの芸術家、故砂沢 ビッキに出会い強い影響を受ける。

その後、数多くの展覧会での入賞や、道外での個展を開催し世界的にも知られる存在となった。

1976年の阿寒湖ユーカラ座パリ公演を演出、総合

監督として大成功させた。

モダンアート展、全道展入選、新郷土芸術賞受賞、など様々な賞を受け、アイヌ民族の代表的なアーティストである。又、アイヌ民族の文化継承者であり若手の指導にもあたり、なくてはならない存在となっている。

とかく、アイヌの木彫りはお土産品としてばかり知られているが、アイヌ文化を基調とした木彫りを現代アートまで高めた功績は計り知れないほど大きい。

違星 北斗 いぼしほくと（1901～1929）

1902（明治35）年1月1日、現余市町に生まれる。本名、滝次郎。1914（大正3）年尋常小学校を卒業。

1917（大正）年から道内各地に出稼ぎ、病気治療を繰り返す。

1925（大正14）年2月、上京し、東京市場協会事務員に就職。同年3月、第2回東京アイヌ学会で講話。

1926（大正15）年11月、アイヌ民族復興の使命を痛感し、北海道へ帰る。1927（昭和2）年、イギリス人宣教師バチェラー氏の創立した平取幼稚園（現平取町）を手伝う。日雇いをしつつアイヌ研究に従事。1928（昭和3）年、歌詩「志づく」（札幌・零詩社）に「違星北斗歌集」が特集号となる。この

頃、病気が再発し、翌年2月に死去。

1930（昭和5）年、遺稿が整理され、遺稿集「コタン」が出版される。1968（昭和43）年、平取町二風谷小学校校庭に、「違星北斗の歌碑」が序幕される。

明治政府の行った同化政策は、アイヌの民族としての基盤を否定し文化を壊滅させることでありました。

言葉や文化を急速に失ったアイヌは土地を奪われ、侮辱され、絶望の縁に追いやられました。その様子を憂いた北斗は、アイヌ民族の復興を願い行動しました。

知里 真志保 ちりましほ （1909年～1961年）

1909（明治42）年2月24日、現登別市に生まれる。

1923（大正12）年3月、北門尋常高等小学校高等科を卒業。1929（昭和4）室蘭中学校卒業後、幌別の役所に勤める。1930（昭和5年）3月、金田一京助のすすめにより、旧制第一高等学校に入学。1933（昭和8）年4月、東京帝国大学文学部入学、アイヌ語研究の道に進みました。

1937（昭和12）年、同大学言語学科を卒業後、同大学院博士課程に進み、文学博士号を取得。

1940（昭和15）年、樺太へ渡り樺太庁立豊原高等女学校で教鞭に立つ。1947（昭和22）年、北海道大

学法文学臨時講師、1949（昭和24）年、専任講師を経て、1958（昭和33）年3月、北海道大学教授となる。

アイヌ民族の視点からアイヌ語を理論的に研究し、『分類アイヌ語辞典』で朝日文化賞を受賞。

アイヌ語地名研究者の山田秀三とも共同しながら、アイヌ語学的に厳密な解釈を徹底させたアイヌ語地名の研究を進め、数々の論文や『地名アイヌ語小辞典』などを刊行し、北海道の地名研究を深化させた。また、言語学者・服部四郎との共同で北海道・樺太各地のアイヌ語諸方言の研究を行いアイヌ語の方言学の基礎を築いた。

心血を注いだ「分類アイヌ語辞典」の完成を見ずに、病没しました。金成マツは叔母、知里幸恵は姉になります。

貝澤 正 かいざわただし

（1912年～1992年）

1912（大正元）年11月18日 現平取町二風谷に生まれる。

1927年3月、平取尋常高等小学校を卒業。1932年、三井山林で冬山造材人夫として働く。1941年開拓団員として「満州」に渡る。1967年、平取町議会議員に初当選2期8年間務める。1941年、二風谷アイヌ文化博物館落成、初代館長となる。

1972年、北海道ウタリ協会副理事長に就任、1974

年、第1次アイヌ訪中団団長として中国訪問。以後、アラスカ、北欧、サハリン、ソ連等を訪れ、先住民と交流。1987年、二風谷アイヌ語教室が開設され、運営委員長を務める。1988年北海道ウタリ協会編「アイヌ史」編集委員長を務める。1991年、二風谷ダム建設のための国による土地の強制収用に反対し、建設省で意見陳述する。三井物産株式会社社長にアイヌへの山林の返還を訴える書状を送る。1992年、逝去（79歳）、本人の遺言により葬儀はアイヌ式で行われた。

萱野 茂 かやのしげる（1926年～2006年）

1926（大正15）年6月15日、現平取町二風谷に生まれる。二風谷尋常小学校を卒業後、造林業に従事、その後、製炭業、樵（きこり）など山仕事に従事する。昭和34年に木彫業を始められ、昭和47年から転職となった著述業を続ける。

昭和47年からは二風谷アイヌ文化資料館副館長、昭和56年から館長を務める。

昭和49年年2月、処女作「キツネのチャランケ」を著し、二作目の「ウエペケレ集大成」で「第23回菊池寛賞」を受賞、「ひとつぶのサッチポロ」に代表する昔話、「二風谷に生きて」などの随筆や「萱野茂のアイヌ語辞典」など多数の著書を刊行、平成元年に「第23回吉川英治賞」を受賞する。

昭和50年に平取町議会議員に初当選し、以来5期

17年余り平取町の教育・アイヌ文化の振興に尽力する。平成6年にアイヌ民族初の国会議員（参議院議員）として国政に参画、国会の初質問ではアイヌ語でアイヌ民族の自然観を紹介するとともに北海道の生態系維持を訴える。

任期中には、アイヌ新法の制定に大きく貢献するとともに、生涯をアイヌ民族の伝統文化継承とアイヌ民族の地位向上に努めた。

2006年5月逝去（81歳）

バチェラー 八重子 ばちえらーやえこ

（1884年～1962年）

1884（明治17）年、現伊達市（有珠）に生まれる。

父の向井富蔵は、洗礼を受けたキリスト教徒で、八重子は1891（明治24）年、英国人宣教師ジョン・バチェラーの手により洗礼を受ける。

1899（明治32）年、有珠の実母の元を去り、バチェラーが札幌に開いたホームズスクールに入学する。

1906（明治39）年、バチェラー夫妻と養子縁組を結び、養女に迎えられる。1909（明治42）年1月、養父母と共に渡英し、カンタベリー大主教の信徒按手を受ける。

1912（明治45）年、バチェラーと共に樺太伝道の後、アイヌ保護学園の寮母を務める。1924（大正

13) 年頃から、幌別、平取などの教会に勤務しました。1931(昭和6)年、歌集「若きウタリに」出版。(発行所東京・東京堂)

キリストの教えとともに生きてきた八重子は、アイヌ民族のユカラや口承文芸などにも、より深く触発されました。八重子の歌は、和人からの差別への抵抗をにじませ、アイヌの疲弊した心を力強く支えました。

野村 義一 のむらぎいち (1914年～)

1914(大正3)年10月20日、現白老町に生まれる。

1930(昭和5)年3月、白老第一尋常高等小学校を卒業後、同校の学校給仕に就く(1934年まで)。

1935(昭和10)年、月寒歩兵第25連隊入隊、翌年除隊。

1936(昭和11)年6月、白老漁業会に就職。1939(昭和14)年に再応召、翌年除隊。白老業業会に復職。1943(昭和18)年に再応召、樺太へ。

1948(昭和23)年、真岡から函館に引き揚げる。1949(昭和24年)に白老漁業会専務理事に就任。

1955(昭和30)年、白老町議会議員に初当選7期28年間務める。

1960(昭和35)年4月、社団法人北海道ウタリ協会常務理事兼書記長に就任。1964(昭和39)年4月、同協会理事長に就任し、1996(平成8)5月の

退任までの32年間、アイヌ民族の地位向上やアイヌ文化の振興、発展に多大な貢献した。その間、ILO総会や国連などの国際会議に参加し、平成4年に国連本部で開催された「国際先住民年」の開幕式典では、先住民族の代表として招待を受けて演説を行うなど、アイヌ民族をはじめとして世界の先住民族の地位向上に寄与した。

1978（昭和53）年以来、「アイヌ新法」の制定に尽力され、その活動は1997（平成9）年、「アイヌ文化振興法」として結実した。

さらに、アイヌ無形文化伝承保存会会長、北海道アイヌ古式舞踊連合保存会会長として、アイヌ文化の伝承・保存に尽力されるなど、広くアイヌ民族の社会経済、文化の発展に大きく貢献する。

昭和49年 紺綬褒章受賞

昭和50年 自治功労賞受賞

昭和55年 北海道町村議会議長会表彰

昭和60年 地域文化功労賞受賞（文部大臣賞）

平成6年 北海道開発功労賞受賞（北海道知事賞）

平成9年 勲五等双光旭日章受賞

平成9年 北海道新聞社文化賞受賞

12. 使用上注意すべき主な用語について

(1) アイヌ (本文4頁を参照。)

(2) 単一民族国家

一つの国の中には、一つの民族だけが住んでいるわけではありません。日本国民だからといって同じ民族であるとは限りません。国連では、様々な国の中の先住民族が失った権利をどうやって取り戻すか話し合いが進められています。アイヌ民族と日本政府もこの話し合いに参加しています。(本文5頁を参照。)

(3) 無文字社会 (本文68頁を参照。)

(4) 酋長

現在、酋長という言葉が店名などに使用されていることがあります。日本語の本来の意味が「未開の部族の長」という意味であり、実状とそぐわない言葉です。また、若年齢層にはなじみのない古語になっています。

村長(むらおさ)という言葉、集落のリーダー、代表者という言葉で表現します。

(5) 熊祭り

アイヌの人々にとってヒグマは、自分たちと深い関わりをもつ《カムイ》(神)の一つです。冬眠明

けの春先に巢内で生まれたばかりの子グマを手に入れたときは、「神々から一定期間の飼育を任せられた」と考えて、その名誉ある役目を喜びます。

一年後に、大切に育てた子グマの魂を肉体から分離させ（＝結果的にこれが「殺す」という行為）、その魂だけを親元へ送り届ける儀式をアイヌ語で《イオマンテ》（イヨマンテとも表記する）と言います。

日本語では「熊祭り」と訳されることも多いですが、儀式の本来の目的からすると「熊送り」「熊の霊送り」さらに丁寧に「飼育した子グマの霊送り」ということになります。

人間がお土産を持たせて丁寧に親元に送った子グマの魂は、他の神々を招いて酒宴を開き、山中で人と出会ったときからの様子を話して聞かせるといわれています。そこでは、人間が子グマである自分をいかに手厚くもてなしてくれたかが話題となり、話を聞いた他の神々は、自分も人間界に行ってみたい、人間に捕えられて丁寧にもてなしを受けてみたい、と思うようになります。

そうして別の神が実際に人間の国にやってくる時、神は天からヒグマのかっこうをしてこの世に誕生します。人間から粗末な扱いを受けるのは親として忍びないので、丁寧に扱ってくれる人間をわざわざ選んで出会いを作ります。その結果、最初に子グマの魂を丁寧に送った人間は、再び山の中で別のヒ

グマに会い、そのヒグマを捕獲し、肉や毛皮を手に行うことができるのです。その魂を再び丁寧に親元に送ることで、さらに良い循環が繰り返されることになり、獲物を授かったとき、神々に感謝することが、さらに次の狩猟につながるのです。動物の肉や毛皮は人間がありがたく利用し、粗末にせずに無駄なく使います。尊い魂に向かって、精一杯の気持ちを示すのです。

こうしたアイヌの精神文化を理解しないと、《イオマンテ》に対してヒグマを殺すのは残酷だ、生贄にしているなどの的外れな感覚を持つこととなります。世界中で毎日、牛肉・豚肉・鶏肉を食べている人は、ありがたいという気持ちを持ち、尊い魂に対して感謝をすることで初めて、アイヌ民族の精神文化に少しだけ近づくことができます。なお、伊藤久男の「イヨマンテの夜」という有名な歌がありますが、この歌には実際の《イオマンテ》とは関係のない「太鼓」や「かがり火」という歌詞があり、《イオマンテ》を大切な儀式と考えるアイヌの人々の中には、誤ったイメージを与える歌として不適切であると考えている人が多い。

(6) アイヌネギ

正式名称はギョウジャニンニク。「中国茶」「タイ米」のように国や地域の付いた呼び名は多く、その意味ではアイヌの人々の長年の食材のひとつをアイ

ヌネギと呼ぶこと自体は、本来は悪いことではありません。

しかし、「アイヌは汚い、くさい」などと差別を受けてきた人々の中には、強い匂いをもつものをアイヌネギと呼ぶことに対して差別の意識をもったの発言であるとして不快感を持つ人が多い。

従って、こうした差別が解消されるまでは、アイヌネギという言葉は避け、ギョウジャンニクと呼ぶ方が良い。

なお、北海道内のスーパーなどでは「きとびる」「ひとびろ」等の名称で売られていることもあります。(どちらも日本語の「祈祷びる」からきている)。

(7) アイヌ犬

アイヌネギと同じで、本来的には悪い言葉ではありません。しかし、長い差別の中で「アイヌは人間ではなくて犬以下だ」と言われたり、アイヌの人々を指して「あ、イヌが来た」などとからわれることが続いたため、アイヌ犬という呼び方を快く思わないアイヌの人が多し。現在は北海道犬という呼び名が一般的です。

(8) アイヌ勘定

「アイヌは数字の数え方も知らない、和人より劣った民族である」ということを連想させるために

まことしやかに作られた言葉で、軽々しく使うべきではない。最も典型的な話は「和人がアイヌと交易をする時に、サケの数を、始まり、1、2～10、終わりと数えて12匹分を手にしなから、10匹分の金しかアイヌに払わない。それでもアイヌは数の数え方を知らないから、だまされてもわからない。そうやって、昔の和人はアイヌをだました」というもの。こうした「はじまり」「終わり」を前後につける数え方を、古くからアイヌ勘定と呼ぶ。「始まり、1、2～5、真ん中、6、7～10、終わり」で13匹という数え方もあります。

この話は、聞く者に「昔の和人はアイヌをだまして、ひどい」と思わせる一方で、「アイヌは数字を知らない」ということを強烈にイメージさせます。

まず、和人の側にだます意図があったのかどうかについては、和人の中には、隙あらばアイヌをうまくだまして、いい思いをしようという商人が実際に多くいたことから、否定はできない。その一方で、サケを本州に運ぶのに長い船旅では傷みやすいので、あらかじめ2割増の取引が当時の商い習慣として一般化しており、そのことをアイヌ側に十分理解してもらうことが困難だったための商人の苦肉の策、という説もあります。

しかし、「アイヌは数の数え方を知らない」というのは全くの誤りで、アイヌ語には1～10と20を表す短い言葉があり、これらの言葉を組み合わせると

13、27、84、192など幾らでも、半ば無限にアイヌ語で表現することができる。「だまされてもわからない」というのは、そういうふりをしていただけで、アイヌの寛大な心の表れだという人もいる。

アイヌ勘定と別に、大雑把に数えることを表す「めのか勘定」という言葉がある。もとは「目の子勘定」(そろばんなどを使わずに目で見ながらおおよその計算をすること)という日本語ですが、アイヌ語で女性のことを《メノコ》というので、「メノコ勘定」=いい加減な数え方、という差別的な言葉として使われることもある。

(9) ニポポ人形

《ニポポ》はアイヌ語で、サハリン地方のアイヌの人々が使っていた人形です。サハリン地方では、病弱な子どもに対して無事成育することを願って、子どもを守護するためのひな人形が作られ、使われました。従って子どもの玩具ではなく、現在、土産品として売られているニポポ人形は、この人形の存在を知った網走市の郷土史研究家の発案で、網走収治監の受刑者によって木工品製造作業のひとつとして作られはじめたのが始まりとされています。

(10) イナクル 「どの人、どなた」という意味のアイヌ語。

胆振地方で作られたという童謡「ピリカピリカ」

の中の歌詞の一節。商店が来店客に商品を購入させるため、幸せを呼ぶ神という全く間違った解釈を思いついて売却し、その甘い言葉にいつしか商品名として使われるようになってしまった。

(11) **ピリカ**

「良い、美しい、立派な」という意味のアイヌ語。童謡「ピリカピリカ」、また「知床旅情」の中の〈～ピリカが笑う〉という歌詞から一般にもよく知られている。しかし「知床旅情」の歌詞の影響で、《ピリカ》の意味を「女性」、または「アイヌの女性の名前」と勘違いされている向きもある。

(12) **モシリ** 「大地」という意味のアイヌ語。

さらに広い意味で「国土」と訳すこともある。《アイヌモシリ》というのは、「人間の（暮らす）大地」という意味で、はるか天上にあるといわれる《カムイモシリ》「神々の（暮らす）大地、神の国」と対（つい）になる言葉です。最近では北海道のことを指すアイヌ語としても使われます。阿寒湖、屈斜路湖を中心に活動するアイヌ詞曲舞踊団「モシリ」の名称も、このアイヌ語に由来しています。

(13) **エカシとフチ**

《エカシ》はおじいさんのことで、自分の祖父の他に、年老いた男性に対しても尊敬の気持ちを込め

て使います。《フチ》はおばあさんのことで、同じく自分の祖母の他に、年老いた女性への尊敬の気持ちを込めた言葉です。アイヌの人々は、お年寄りを豊富な知識と経験を持つ知恵袋、生きた百科事典として、非常に大切にしてきた。

(14) チセ

(本文38頁を参照。)

(15) トー

沼や湖を表すアイヌ語。阿寒湖近くのオンネトー、パンケトーは《オンネ》(大きな)《トー》(湖)《パンケ》(川下の)《トー》(湖)という意味の地名。

(16) 月と太陽

太陽のことをアイヌ語で《チュブ》といい、月は《クンネ》(暗い、夜の)という言葉の前に付けて《クンネチュブ》(夜の太陽=月)という。どちらもアイヌの人々にとって神様なので、《チュブカムイ》(太陽の神)《クンネチュブカムイ》(月の神)という言い方もあります。

本州では、月の中の黒い陰影を「ウサギが杵を持って餅をついている」と言いますが、アイヌの人々には次のような物語が語り伝えられています。

「祖母と二人暮らしの少年は、怠け者で家の手伝

いも大嫌い。ある夜に祖母から近くの川への水汲みを命じられた少年は、いやいや手桶とひしゃくを持ったものの、すぐには家の外へ出ようとせず、家の柱や炉縁をひしゃくで叩きながら、散々に文句を言ったあげくに、渋々と川へ向かう。それを天から見ていた神が、怒ってその少年を月に召し上げて、怠け者への見せしめにした。だから今でも満月の日、月の表面には片手に手桶、片手にひしゃくを持った少年が立っているの見える。

この話をアイヌ語で伝承していたアイヌのおばあさんは、子どもの頃、満月の夜に外でこの話を親から聞かされたと言い、身近な素材を使って人としての生きる道を説くアイヌの人々の巧みな教育の様子をよく表しています。

(17) ペツとナイ

どちらもアイヌ語で一般的に「川」と訳される。二つの言葉の使い分けは、地方によっても多少異なるが、《ペツ》がやや大きい川、《ナイ》がやや小さい川や沢を表すことが多い。アイヌの人々は、かつて河川流域に生活基盤を置いていたことから、地名には《ペツ》や《ナイ》という言葉が数多く使われ、現在でも登別、紋別、稚内、静内など市町村名にもなっています。

(18) シシャモ

アイヌ語の《スス・ハム》(ヤナギの・葉)が訛ってシシャモという魚名になったと言われている。シシャモの産地で知られる北海道の釧路地方には、「飢饉に苦しむアイヌの人々が、神々に助けを求めたところ、『ヤナギの葉を採取して川に流すと良い』との御告げがあり、村中の者がその言葉どおりにヤナギの葉を流したところ、やがて下流から大量のシシャモが遡上し、人々の飢えを救った」という物語が伝えられている。

(19) カムイチェブ

《カムイ》は神、《チェブ》は魚を意味するアイヌ語で、アイヌの人々の主食のひとつであったサケを、神が授けてくれた魚という意味からこう呼ぶ。秋になると河川に遡上してくるサケは、アイヌの人々が語り伝えてきた物語の中に「川底のサケは腹が傷つき、水面上のサケは陽の光で背中がこげるくらいにひしめき合って、川を上ってくる」と描写されるほど、大量で、豊かな恵みをもたらしてきた。捕獲したサケは、生で食べたり、焼く、煮るなどの方法で新鮮な味覚を楽しむ他、多くは保存材料として蓄えられた。サケは食用の他に、皮を使って靴を作ったり、古くは数十枚の皮を縫い合わせて着物を作るなど、捨てるどころなく使われた。アイヌの人々は、古くから、食生活を支えるサケの豊漁を

神々に感謝する儀式を行ってきた。現在、札幌市をはじめ道内各地では、こうした先祖の精神を継承していこうと、新しいサケを迎える儀式を再現、復活させています。

(20) ルイベ

アイヌの人々の伝統的な料理のひとつです。新鮮なサケの内臓を取り出した身をそのまま凍らせて、食べる直前にさっと火にあぶって皮をむいたりやわらかくして、刺し身のように薄く切り、とけ始めたものを口に運ぶと、とてもおいしい。アイヌ語で、《ル》はとける、《イペ》は食べ物という意味です。

現在では、アイヌの人々だけでなく、札幌市内の料理店でもメニューに加えられるなど、北海道の郷土料理のひとつになっています。

(21) ウボボ (本文46頁を参照。)

(22) ムックリ

アイヌ民族の楽器で、日本語で口琴と訳されます。口の中で音を反響させるムックリのような楽器は世界各地にあり、日本でも江戸時代の文献に、その音色から「びやぼん」と呼ばれた口琴が江戸の庶民の中で大流行し、余りの熱狂ぶりにお上から禁止令が出たという記録も残っています。

ムックリは主に女性が使うもので、巧みな演奏方法によって、さまざまな響きを奏でることができる。ムックリは現在のアイヌの人々の間でも人気があり、年に一回、全道ムックリ大会も開かれています。

(23) トンコリ

アイヌの弦楽器のひとつ。主にサハリン地方のアイヌの人々が使用していたもので、日本語では「五弦琴」と訳されます。長さ1 m強、幅は約10cm、厚さは約5 cm。座った状態で、肩に立てかけたり頭部を左にして抱きかかえたりしながら、弦を弾いて演奏しました。

近年、アイヌの人々の中で製作や演奏への取り組みが盛んで、CDも作られています。

(24) チャランケ

アイヌの人々は、もめ事に対してけんかや暴力ではなく、専ら言葉の力を借りて解決してきました。当事者同士が正々堂々と意見を主張し合い、納得のいく解決方法をさぐっていったと言われています。こうした話し合いの場で自分の考えを述べることを、アイヌ語で《チャランケ》といいます。

日本語の北海道方言に「人に文句を言う、言いがかりをつける」などという意味で「チャランケをつける」ということがありますが、これはももとの

アイヌ語の意味とは大きく食い違う誤った使い方です。

(25) エトピリカ

くちばしのきれいな鳥として人気のあるエトピリカという鳥名は、アイヌ語がもとになっている。

《エトゥ》(鼻・くちばしが)《ピリカ》(美しい)という意味。同じウミスズメ科のケイマフリも、アイヌ語の《ケマ》(脚)、《フレ》(赤い)の転用です。

(26) タンチョウ

アイヌ語で《サロルンカムイ》(湿原に住む神)という。アイヌの人々の伝承では、じめじめして湿った場所には、魔物や精神の良くない者、悪いことをした人が住むと言われており、その意味から、あまり尊い存在とは思われていません。

(27) シマフクロウ

アイヌ語で《コタンコロカムイ》(村を見守る神)といいます。《コタン》は村や集落、《コロ》は持つ・～を掌握する、《カムイ》は神という意味です。アイヌの人々の中では非常に尊い存在として大切にされてきました。夜間の集落を警護し、地震、津波、火山の噴火をはじめ自然災害の恐れのあるときは、事前にそれを察知して人間に鳴き声で知らせ

てくれるという。

(28) ニシパ

「長者、物持ち、旦那、大人」などと訳されることが多い。社会人として一人前で何不自由ない暮らしを送ることのできる男性、そうした地位にある人、人々から敬愛される紳士などを指します。

平取町では地元名産のトマトを使ったジュースに「ニシパの恋人」という商品名をつけている。

(29) 春夏秋冬

春 = パイカラ、夏 = サク、秋 = チュク、冬 = マタ

(30) カムイパボニカアーホイヤ

「明日天気になあれ、、、」といった「おまじない」のように誤った理解がされていますが、このようなアイヌ語はありません。

アイヌ語で表現するとすれば、「ニシャッタ シリピリカ (あした晴れろ)」と言い、より丁寧に言おうとすれば「ニシャッタ シリピリカ ワ エンコレ (あした、天気にしてください)」と言います。

ニシャッタは「明日」、シリピリカが「天気、晴れ」、ワは「～して」、エンコレは「ください」の意味です。ただしこれは自分ひとりをお願いする場合の言い方です。1人以上で、みんなで一緒をお願いする場合は最後の言葉を「ウンコレ」というような

言葉の使い分けがあります。

13. よくある観光客からの質問

(1) 純粋のアイヌの人っているの？

純粋のアイヌの人という質問ですが、アイヌの人々あるいはアイヌ民族を血で分けることはできません。日本全体がそうであるように長い歴史の中で周りの色々な国の文化の影響を受けつつ形成されて来たアイヌというグループであるため、単純に血で人とすることはできません。

(2) 沖縄の人に似ていますね。

良くいわれる質問ですが、何故似た風貌の人々が南と北に分かれているかは未だ以ってわかりません。学説にはアイヌ・琉球同系説などもあります。

(3) 昔から住んでいたの？

学説ではアイヌのルーツははっきりとさだまっています。1万年くらい前までさかのぼれるという説から5千年くらい前、あるいは700年前まで大きな幅があります。

(4) 一般の日本人に比べてアイヌの人々の暮らしに違いはありますか？

アイヌ民族の文化や暮らしは、時代とともに様々な変化してきました。現在の生活 - 衣食住、社会のしくみや教育、仕事、遊び - は、日本に住む大多数の人々とあまり変わるところはありません。しか

し、道民一般との間には格差が見られ、北海道が実施した調査によれば生活保護率は平均の2倍、高校・大学の進学率も着実に上昇はしているが依然格差は残っています。

(5) 今でもアイヌ語を話しているの？

会話の中でアイヌ語の単語は良く出てきますが、日常会話としてアイヌ語が話されることは殆どありません。

(6) アイヌの人々は手先が器用ですね。(職業が木彫りだと思っている)

伝統的な技術が生活の中で今に伝えられています。観光地でよく目につく木彫りを生業とするアイヌの人々は、現在分かっている人口の全体のわずかであり、大多数のアイヌの人々は一般の人と変わりません。

(7) 入れ墨は何故するのですか？今は見かけないけれどどうして？

理由については化粧であるとか魔除けであるとか諸説ありますが、女性の成人儀礼としての習慣であったとされています。明治になって政府から禁止令が出され減っていった今は殆どその風習は残っていません。

(8) アイヌの子供と日本人の子供は同じ学校に入っているの？

明治34年の「旧土人児童教育規定」によってアイヌ児童と和人児童との別学が定められた時期もありましたが、現在は、同じ学校に通っています。

(9) 何を食べているのか？

現在の生活 衣食住は日本に住む大多数の人々とあまり変わることはありません。(食文化については本文9頁を参照。)

(10) 結婚はどういうものか？

結婚の形式は文献によれば、古くは「嫁入り婚」が多かったようです。女性は肌に直接まく帯の形態によって母系のルーツがわかるようにし、男性はイナウ(木幣)につけるイトクパと呼ばれる刻み文様によって父系のルーツがわかるようにしていました。

(11) どんな家に住んでいるの？

現在の生活 衣食住は日本に住む大多数の人々とあまり変わることはありません。(住文化については本文38頁を参照。)

(12) 伝統文化はどのように伝承しているのか？

各地で個人、団体によって活甍に文化伝承保存活

動が行われています。明治以降の同化政策によって消えつつあった風習等がこういった活動を通じて各地で伝承されています。

(13) お年寄りはどうしているの？

年長者は先達者として尊敬の念を払われ、伝承者の育成に対応しています。伝統文化が今に受け継がれているのもエカシ（おじいちゃん）やフチ（おばあちゃん）たちが苦難の中で伝承・保存に努めてきた努力に負うところが大きいのです。

14. 主なアイヌ関連団体・機関

社団法人北海道ウタリ協会

住所：札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7ビル

TEL：011-221-0462 FAX：011-221-0672

<http://www.ainu-assn.or.jp>

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

住所：札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7

TEL：011-271-4171 FAX：011-271-4181

<http://www.frpac.or.jp>

アイヌ文化交流センター

住所：東京都中央区八重洲2丁目4番13号

アーバンスクエア八重洲3階

TEL：03-3245-9831 FAX：03-3510-2155

北海道立アイヌ総合センター

住所：札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7ビル

TEL：011-221-0462 FAX：011-221-0672

（ホームページは開設していない）

北海道立アイヌ民族文化研究センター

住所：札幌市中央区北3条西7丁目北海道庁緑苑ビル庁舎1階

TEL：011-272-8801 FAX：011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/>

北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進グループ

住所：札幌市中央区北3条西6丁目

TEL：011-231-4111 FAX：011-232-4107

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp>

15. アイヌ文化関連施設（資料の展示見学や各種体験ができる施設）

No	名 称	所在地 / 電話番号 / ホームページ	内 容	利用期間
1	函館市 北方民族資料館	函館市末広町21 7 TEL0138 22 4128 http://www.zaidan-hakodate.com	アイヌ民族資料等の展示。アイヌ民族生活用具は国の重要有形民俗文化財に指定。ムックリの製作・演奏体験。	4～10月 9:00～19:00 11～3月 9:00～17:00
2	北海道立 アイヌ総合 センター	札幌市中央区北2条西7丁目 かでの2・7ビル TEL011 221 0462 (開設していない)	資料展示室や図書情報室、保存実習室などからなり、アイヌ民族の歴史や文化について紹介や学習する施設。	通年 9:00～17:00
3	札幌市アイヌ 文化交流 センター サッポロピリカ コタン	札幌市南区小金湯27 TEL011 596 5961 (開設していない)	アイヌ民族の生活、歴史、芸術を楽しみながら学び、見て、触れて体験できる施設。	通年 8:45～22:00 展示室、自然の里、歴史の里は9:00～17:00)
4	北海道 開拓記念館	札幌市厚別区厚別町小野幌53 TEL011 898 0456 http://www.hmh.pref.hokkaido.jp/	北海道の自然や歴史に関する資料の調査・収集・保存を行う。博物館常設展示ではアイヌ文化が成立する過程を交易という観点からとらえて展示。	通年 9:30～16:30 (入館は16:00まで)
5	苫小牧市博物館	苫小牧市末広町3 9 7 TEL0144 35 2550 http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/	勇払原野や苫小牧の自然・歴史、アイヌ文化、スケートの歴史等を紹介する総合博物館。	通年 9:30～17:00
6	のほりべつ クマ牧場	登別市登別温泉町 TEL0143 84 2225 http://www.bearpark.jp	ヒグマの生態観察ができる。ユウカラの里（冬季閉鎖）ではアイヌの生活様式などを再現。アイヌ民族舞踊の披露等。	通年（季節により変動）11月下旬～12月中旬 ロープウェイ検査の為連休

No	名 称	所在地 / 電話番号 / ホームページ	内 容	利用期間
7	昭和新山 アイヌ記念館	壮瞥町字昭和新山 Tel.0142 75 2053 (開設していない)	アイヌ舞踊の見学など、 アイヌ民族の文化に触れられる。	4～10月 8:00～17:00
8	アイヌ民族 博物館	白老町若草町2丁目3-4 Tel.0144 82 3914 http://www.ainu-museum.or.jp/	アイヌ民具約1,000点を テーマ別に常設展示する とともに、アイヌの伝統 舞踊や楽器ムックリの製 作・演奏など、さまざま なアイヌ文化に関する体 験ができる。	通年 8:45～ 17:00 休館日 12/29～ 1/5
9	協業民芸	白老町東町2丁目5-5 Tel.0144 82 2366 http://www4.ocn.ne.jp/~koroppo/	木彫教室、アイヌ講話 (歴史、文化等) アウ トドア・食体験	通年 8:00～ 17:00
10	二風谷 アイヌ文化 博物館	平取町字二風谷55 Tel.01457 2 2892 http://www.ainu-museum-nibutani.org/	趣向を凝らした展示方法 と映像資料等で沙流川流 域のアイヌの伝統的生活 文化を紹介。	通年 9:00～ 16:30
11	二風谷 工芸センター	平取町二風谷 Tel.01457 2 3299 http://www.ainu-museum-nibutani.org/html/kougN.htm	永い年月をかけて培われ てきた伝統の意匠と技巧 にふれ木彫りや刺繍の指 導を受けることができる。	5月～10月末 9:30～17:00
12	萱野茂 二風谷 アイヌ資料館	平取町二風谷55 Tel.01457 2 3215 http://www.ainu-museum-nibutani.org/html/sryo0N.htm	館長自ら収集・制作し た、アイヌ民具600点余 を展示。また、250名着 席可能な説明コーナーも ある。	通年 9:00～ 16:30 12～3月は下記 館長宅に要事前 連絡 01457 2 2164
13	シャクシャイン 記念館	新ひだか町静内真歌7-1 Tel.01464 2 6792 (開設していない)	アイヌ民族の文化と歴史 を紹介する英雄シャク シャインの記念館。	5～10月 9:00～18:00 11月～4月 9:30～16:30

No	名 称	所在地 / 電話番号 / ホームページ	内 容	利用期間
14	アイヌ民俗資料館	新ひだか町静内真歌7 1 TEL01464 3 3094 http://www1.ocn.ne.jp/~sibchari/index.htm	アイヌの人々が日常生活に用いた民具などを100種類、500点以上保存・展示。	5～11月 9:00～17:00
15	川村カ子トアイヌ記念館	旭川市北門町11丁目 TEL0166 51 2461	大正5年開設の北海道最古のアイヌ記念館。アイヌ民族の歴史や文化を正しく伝えることを目的に貴重な資料、生活用品を展示している。	通年 9:00～17:00 (7・8月のみ 8:00～18:00)
16	旭川市博物館	旭川市神楽3条7丁目 TEL0166 69 2004 http://www.htokai.ac.jp/DD/MUSEUM/MUSEUM.html	大雪山系に生息する動物の標本、アイヌ民族の資料、古代遺跡からの出土品など郷土の歴史を知る数々の資料を展示。	通年 9:00～17:00 (入館16:30まで)
17	アイヌ文化の森・伝承のコタン	鷹栖町嵐山 TEL0166 52 1541	アイヌ文化の保存と伝承を目的に、チセ(笹葺住居)3棟を復元。嵐山公園センター内にアイヌの人びとの有用植物を展示。	9:00～17:00 (入館は16:30まで)
18	エコミュージアムおさしまセンターBIKKYアトリエ3モア	音威子府村字物満内55 TEL01656 5 3980 http://www2.vill.otoinappu.hokkaido.jp/bikki/osc04top.htm	近代彫刻界の巨匠・砂澤ビッキの作品を100点以上展示。アトリエも再現。	4/26～10/31 9:30～16:30
19	帯広百年記念館	帯広市緑ヶ丘2 TEL0155 24 5352 http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/index.htm	常設展示室では先史時代から十勝のアイヌ文化・十勝の自然・開拓や農業の歴史などが紹介されている。	通年(貸室) 9:00～22:00 (常設展示室) 9:30～16:30

No	名 称	所在地 / 電話番号 / ホームページ	内 容	利用期間
20	道立 北方民族博物館	網走市字潮見309 1 Tel.0152 45 3888 http://hoppohm.org	グリーンランドから北欧まで、アイヌ文化を含めた北方民族の文化とオホーツク文化を紹介する我が国唯一の博物館。	通年 9:30～16:30 (7月～9月 9:00～17:00) 休館日あり
21	釧路市立博物館	釧路市春湖台 1 7 Tel.0154 41 5809 http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/	釧路の自然、先史時代、近世と近代、アイヌ民族の歴史等の資料を展示。	通年 9:30～17:00 (入館は16:30まで) 休館日 日・祝 ただし祝日は4/29～11/3を除く
22	屈斜路コタン アイヌ民俗 資料館	弟子屈町 屈斜路市街1番通11 Tel.01548 4 2128 (開設していない)	アイヌ民族の文化と歴史の移り変わり、屈斜路湖の形成過程、気候風土等の資料を展示。	4/29～10/31 9:00～17:00
23	阿寒湖アイヌ コタン	釧路市阿寒町 阿寒湖温泉4丁目7 19 Tel.0154 67 2727 (阿寒アイヌ工芸協同組合) http://www.marimo.or.jp/~akanainu/welcome.html	木彫体験、ムックリ講習、アイヌ文様刺繍体験等。「オンネチセ」では古式舞踊等の鑑賞、「アイヌ生活記念館」(5～10月10時～22時)では生活用具や衣服などを展示、「森と湖の美術館」(5～10月10時～17時)ではアイヌ民族の生活を木彫で表現。	「阿寒湖アイヌコタン」 通年 9:00～22:30 「オンネチセ」 通年 9:00～22:00

主なものを掲載しました。 休業日、利用料金等はこちらでご確認ください。

16. アイヌの人たちに関わる歴史

7世紀以前	続縄文文化期
658	『日本書紀』に阿倍比羅夫「蝦夷」を討つとの記述。 <small>あべのひらふ えみし</small>
7～11世紀	オホーツク文化期
8～13世紀	擦文文化期
135ㄩ(延文元)	『諏訪大明神絵詞』のなかでアイヌのことに言及 <small>すわたいめいじん えことば</small>
144ㄩ(嘉吉3)	安東盛季が蝦夷島に逃げ渡り、この後、多数の和人が移住。 <small>あんどうもりすえ</small>
145ㄩ(長禄元)	コシャマインの戦い
159ㄩ(文禄2)	豊臣秀吉、蠣崎慶広(後に松前と改姓)に朱印状を与える。 <small>かきざきよしひろ</small>
160ㄩ(慶長9)	慶広、徳川家康より黒印状を受ける。
166ㄩ(寛文9)	シャクシャインの戦い
178ㄩ(寛政元)	クナシリ・メナシの戦い
179ㄩ(寛政11)	幕府、東蝦夷地を直轄地とする。
180ㄩ(文化4)	幕府、松前・西蝦夷地を直轄地とし、松前藩を梁川(現福島県梁川町)に移す。 <small>やながわ</small>
182ㄩ(文政4)	幕府、松前・蝦夷地を松前藩にもどす。
185ㄩ(安政元)	日露和親条約締結(千島は得撫水道を境界とし、樺太は雑居の地とする) <small>うるつが</small>
185ㄩ(安政2)	箱館の開港に伴い、幕府は木古内、乙部以北を再び直轄とし、東北諸藩に警備を命ずる。 <small>き こない おとべ</small>
186ㄩ(明治2)	開拓使設置。蝦夷地を「北海道」と改称。11カ国86郡をおく。 場所請負制度を廃止。*制度は廃止としたが、請負人は「漁場持ち」と改称されて、従来通りの漁場経営を認められた(1876(明治9)まで)

1871(明治4)	戸籍法制定、アイヌを「平民」に編入。 開拓使、布達によりアイヌの人たちの葬儀の際の家送り、女子の入れ墨、男子の耳飾りを禁止し、農耕、日本語の習得を奨励する。
1872(明治5)	開拓使、東京芝増上寺の「仮学校」、東京渋谷の「開拓使官園」にて、アイヌの人たちへの日本の教育を試みる。 開拓使、「地所規則」「北海道土地売貸規則」を定める。
1875(明治8)	樺太・千島交換条約締結により、樺太からアイヌの人たち108戸841名を宗谷に移住させる(翌年6月、対雁に強制移住させる)。 最初の屯田兵198戸が琴似(札幌市)に入地。
1876(明治9)	開拓使札幌本庁、アイヌの人たちの仕掛け弓による狩猟を禁止し、代わりに猟銃を貸与することを布達「北海道鹿猟規則」を定める。 開拓使札幌本庁はアイヌの人たちの耳飾り(男子)入れ墨(女子)を厳禁、違反者には「厳正ノ処分」をするよう本・支庁長に命じる。
1877(明治10)	「北海道地券発行条例」制定(アイヌの人たちの居住地を官有地第三種に編入)
1878(明治11)	開拓使、アイヌの人たちの呼称を「旧土人」と統一する。
1880(明治13)	平取村、有珠村にアイヌ子弟の学校が設立される。
1882(明治15)	開拓使を廃し、函館・札幌・根室の3県をおく。
1883(明治16)	札幌県、十勝川上流の鮭漁を禁止する。
1884(明治17)	占守島のアイヌの人たち97名を色丹島に移住させる。
1886(明治19)	函館・札幌・根室の3県、北海道事業管理局を廃止し、北海道庁をおく。 「北海道土地私下規則」制定
1889(明治22)	アイヌの人たちの食料分としての鹿猟が禁止となる。
1894(明治27)	旭川近文原野のアイヌの人たちへの給与予定地150万坪のうち、45万8000坪を割渡す。

1897(明治30)	「北海道国有未開地処分法」公布
1899(明治32)	「北海道旧土人保護法」公布
1900(明治33)	旭川給与地払い下げ事件起こる。
1901(明治34)	「旧土人児童教育規程」公布 * 国費により、平取尋常小学校、元室蘭尋常小学校、虻田第二尋常小学校、白老第二尋常小学校が設立される。以後、明治末年までに21校が設立された。校名は、同一通学区域内に和人の児童が通う小学校と、アイヌの児童が通う小学校がある場合、前者を「第一尋常小学校」、後者を「第二尋常小学校」とした。
1908(明治41)	「旧土人児童教育規程」廃止(1916(大正5)第二次「旧土人児童教育規程」公布)
1916(大正5)	新冠村の80戸のアイヌの人たちが御料牧場の都合で強制移転。
1922(大正11)	第二次「旧土人児童教育規程」廃止
1923(大正12)	知里幸恵編『アイヌ神謡集』刊行
1931(昭和6)	札幌の堯祐幼稚園で「第1回全道アイヌ青年大会」が開催される。
1934(昭和9)	「旭川市旧土人保護地処分法」公布
1946(昭和21)	「北海道アイヌ協会」設立(1961(昭和36)「北海道ウタリ協会」と改称)
1984(昭和59)	北海道ウタリ協会総会において、「アイヌ民族に関する法律(案)」を決議。伝統的な民族舞踊が「北海道アイヌ古式舞踊」として、国の重要無形民俗文化財に指定される。
1988(昭和63)	北海道、北海道議会、北海道ウタリ協会が「アイヌ民族に関する法律」制定について国に要望する。
1989(平成元)	関係省庁による「アイヌ新法問題検討委員会」設置。
1994(平成6)	アイヌ初の参議院議員、萱野茂氏が当選(比例代表繰り上げ)

1995(平成7)	内閣官房長官の私的諮問機関として「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」設置。
1996(平成8)	「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」が報告書を提出。
1997(平成9)	「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」公布(以下「アイヌ文化振興法」)同法に基づき、「財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」設立。「北海道旧土人保護法」並びに「旭川市旧土人保護地処分法」廃止。 二風谷ダム訴訟の判決言い渡し(土地強制収用は違法、アイヌ民族を先住民族と認める)
1999(平成11)	北海道庁が「アイヌ文化振興法」第6条に基づく、指定都道府県として「アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本計画」を策定。
2000(平成12)	国は「アイヌ文化振興等施策推進会議」を設置、伝統的生活空間(イオル)の再生を含めた検討を始める。 平行して道は「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」を設置。
2002(平成14)	北海道において「伝統的生活空間(イオル)再生構想の具体化に向けて」を策定。 「アイヌ文化振興等施策推進会議」を開催(国主宰/6月)
2004(平成16)	国連総会は、2005年1月1日からの第2次「世界の先住民の国際10年」を採択。
2006(平成18)	国はアイヌの伝統的生活空間(イオル)の再生事業を白老地域において先行実施。
2007(平成19)	国連総会において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を採択。日本政府は賛成票を投じた。(賛成144、反対4、棄権11、欠席33)

2008(平成20)	<p>国はアイヌの伝統的生活空間（イオル）の再生事業の白老地域に平取地域を加え、当面平成22年度までの先行実施とした。</p> <p>社団法人北海道ウタリ協会の定例総会・代議員会（H20 5.16主催）において、2009年4月1日から「社団法人北海道アイヌ協会」と名称を変更することを決定した。</p> <p>衆参両議院において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択される。</p> <p>内閣官房長官によって、総合的な施策の確立に取り組むため「アイヌ施策のあり方に関する有識者懇談会」が設置される。</p> <p>（平成21年8月までに提言を取りまとめ政府に報告）</p>
------------	---

「ガイド教本・アイヌ民族編」

編集：(社)北海道観光連盟アイヌ文化部会ワーキンググループ

秋辺日出男 阿寒アイヌ工芸協同組合（阿寒）

貝澤 和明 (社)北海道ウタリ協会

川村 久恵 川村カ子トアイヌ記念館（旭川）

村木 美幸 (財)アイヌ民族博物館（白老）

吉原 秀喜 平取町立二風谷アイヌ文化博物館（平取）

加賀谷博司 (社)北海道観光連盟

協力：大谷 洋一 北海道立アイヌ民族文化研究センター
日本観光協会

発行：(社)北海道観光振興機構

〒060 - 0004

札幌市中央区北 4 条西 4 丁目 伊藤加藤ビル 5 F

TEL011 - 231 - 0941、FAX011 - 232 - 5064

<http://www.visit-hokkaido.jp/>

発行：平成19年 3 月30日

平成21年 3 月31日（改訂版）
